



南 海 道 と 歩 く

いにしえの南海道をたどり、歴史と景観を楽しむガイドブック

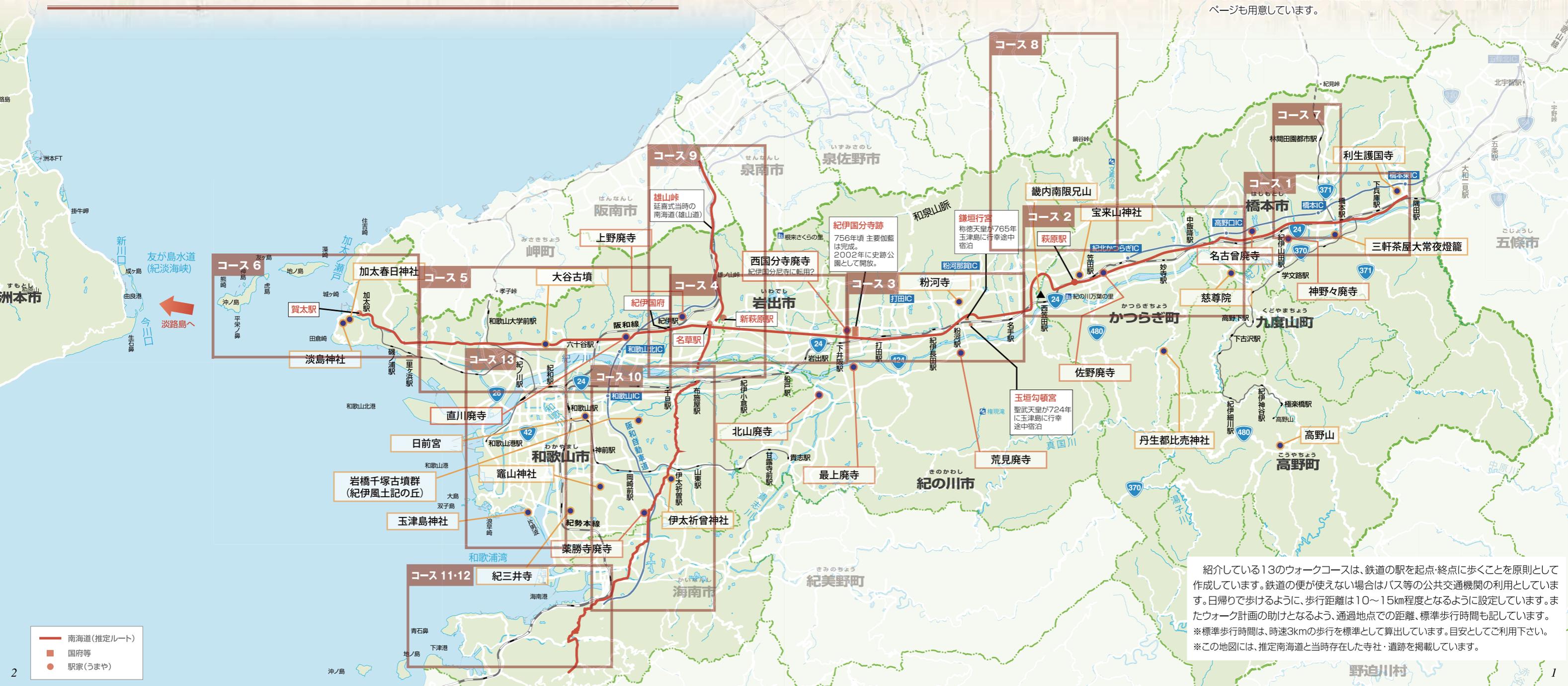
※奈良・平安の時代、紀の川流域には南海道という国道が通っていた。
ロマンを追って、歴史と文化を味わいながら歩く13のウォークコースを紹介！

南海道と歩く

いにしへの南海道をたどり、
歴史と景観を楽しむガイドブック

南海道の経路に関する調査研究、現地踏査および歴史街道ウォークという3年間の活動成果をもとに、「南海道を歩く」ガイドブックを作成しました。南海道そのものを歩くことは難しいですが、現在に継承されている部分も多いので、できるだけそのルートに近い道を歩くことで、どういう道か知ってもらい、体感することを目的として作成しています。

古くに天皇が紀伊国へ行幸された道中を偲び、道筋で詠まれた万葉の歌の景観をイメージし、今に残る文化財を訪ねることができます。歴史と文化と自然が楽しめる、今までにない新しい感覚のウォークコースが満載です！
ウォークマップではコース周辺の見どころスポットを掲載し、写真付きの説明もあります。さらに見どころの補足解説や、当該地域の文化的意味合いの説明のページも用意しています。



— 南海道(推定ルート)
■ 国府等
● 駅家(うまや)

紹介している13のウォークコースは、鉄道の駅を起点・終点に歩くことを原則として作成しています。鉄道の便がつかない場合はバス等の公共交通機関の利用としています。日帰りで行けるように、歩行距離は10~15km程度となるように設定しています。またウォーク計画の助けとなるよう、通過地点での距離、標準歩行時間も記しています。※標準歩行時間は、時速3kmの歩行を標準として算出しています。目安としてご利用下さい。※この地図には、推定南海道と当時存在した寺社・遺跡を掲載しています。



眺望地より背山・妹山を望む

このあたりから、背山・妹山を眺めることができる。万葉びとの目の前にはささげもののない風景が広がっていたはずである。

相賀大神社

総社三郎明神社と呼ばれた高野山密蔵院相賀荘の惣社。正平10年(1355)の銘をもつ砂岩製燈籠が残る。県指定重要文化財。

到着

JR 高野口駅

- 1.0km 20分
- 4.7km 94分
- 1.7km 34分
- 2.9km 58分
- 1.6km 32分
- 0.7km 14分

JR 隅田駅

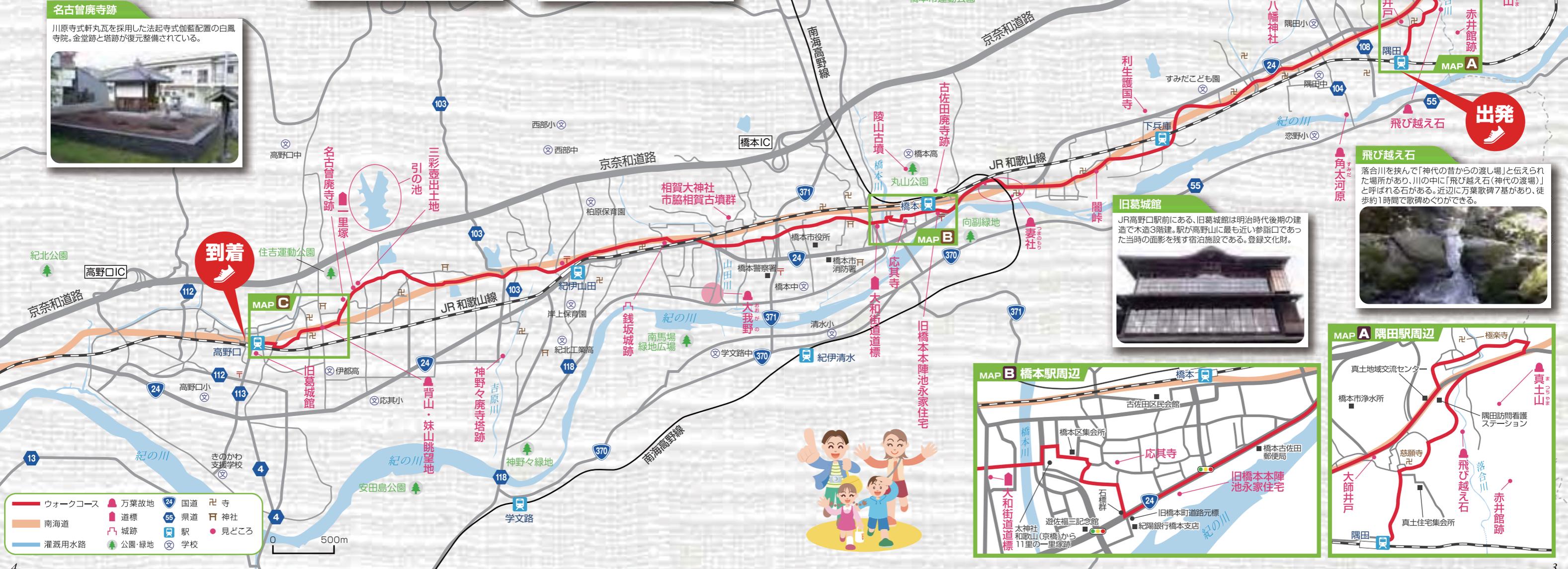
出発

1 真土山と越え

真土山は紀伊国と大和国との国境にあります。古代の旅人たちがこの地を過ぎる際の感慨を詠んだ歌は多く万葉歌として残っています。古の旅に思いをはせつつJR隅田駅から真土山を越え、大和街道に沿って進み、JR高野口駅に至ります。

名古屋廃寺跡

川原寺式軒丸瓦を採用した法起寺式伽藍配置の白鳳寺院。金堂跡と塔跡が復元整備されている。



飛び越え石

落合川を挟んで「神代の昔からの渡し場」と伝えられた場所があり、川の中に「飛び越え石(神代の渡場)」と呼ばれる石がある。近辺に万葉歌碑7基があり、徒歩約1時間で歌碑めぐりができる。

旧葛城館

JR高野口駅前にある、旧葛城館は明治時代後期の建造で木造3階建。駅が高野山に最も近い参詣口であった当時の面影を残す宿泊施設である。登録文化財。





万葉集の背山・妹山

真土山(大和国と紀伊国の国境いの山)を越えて、南海道を25キロほど西に下ると、紀の川の北岸に背山(168m)がそびえています。頂上からは、ゆったりと蛇行する紀の川の流れを楽しむことができ、そのすばらしい風景にはしばし時を忘れます。この山には峯が二つあり、この二峯が、背山・妹山であると考えられます。紀の川を挟んで、背山の対岸にある丘陵を妹山とする説も古くからあります。15首も詠まれ、万葉集に詠まれた山々の中で、第二番目の多さを誇ります。

**我妹子に 我が恋ひ行けば
ともしくも 並び居るかも 妹と背山**

萩原駅家

笠田の集落から宝来山神社前を過ぎ背山に向かう右側に萩原集落があり、このあたりに南海道萩原駅家が置かれたものと考えられ、小字「木戸口」で発掘調査が実施されましたが駅家の跡は明確ではありません。萩原集落以外の笠田集落などに萩原駅家を想定する説もあります。南海道駅家は大宝2年(702)に置かれた賀太駅家が初見です。当時は30里(約16km)毎に駅家を配置しており、紀伊国でも都まで駅家が置かれており賀太駅家から30里毎に名草駅家、萩原駅家が置かれたものと見られ距離的には萩原集落付近となります。しかし、萩原駅家は大宝2年には記載がなく、弘仁2年(811)突然、萩原・名草・加太の駅家が廃止されます。都が大和の平城京から山城の平安京へ遷ったのに伴い、南海道のルートが変更されたためと考えられています。



宝来山神社

**これやこの 大和にしては 我が恋ふる
紀路にありといふ 名に負ふ背山**

この歌の作者は阿閉皇女、後の元明天皇です。おそらく持統天皇の紀伊国行幸(690年)に同行した折の歌です。すでにこの時代から、背山は都でも有名な紀伊国の名所でした。「これやこの」という言葉に、憧れの背山に接した皇女の喜びの気持ちが躍っています。

**紀路にこそ 妹山ありといへ
玉くげ 二上山も 妹こそありけれ**

二上山は大和国の西端に鎮座する山です。万葉集では悲劇の皇子・大津皇子が葬られている山として有名です。この山も雄岳・女岳の二つの峰からなる印象深い山容をしています。作者は紀伊国の背山・妹山と二上山を重ね合わせて見えています。

宝来山神社

社伝では光仁天皇宝亀4年(773)に和氣清麻呂が八幡神を勧請したのに始まるとし、本社四殿に猿田彦大神・菅原大神・八幡大神・大山祇大神を祀っています。元暦元年(1184)に山城神護寺柿田庄が立券されてからは荘園の鎮守となったようです。神護寺の「柿田庄絵図」を延徳3年(1491)に写したとみられる「紀伊国柿田庄絵図」、また、慶安3年(1650)作成の「賀勢田庄絵図」などが社蔵されています。現本殿四棟は慶長19年(1614)の再建棟札があり絵図とともに重要文化財に指定されています。

小田井用水

紀の川上流域部、橋本市高野口町小田にある井堰(頭首工)から紀の川北岸を岩出市根来まで流れる約33kmの農業用水路で、受益面積は、伊都郡・那賀郡一帯の約1,000ha以上の農地で県下最大規模。開削は宝永4年(1707)橋本市学文路の庄屋大畑才蔵が紀州藩の事業として開始し第1期工事小田～名手市場、第2期工事名手市場～打田間、第3期工事打田～根来間と順に延長して享保年間の完成。粉河寺境内に治水の神様大畑才蔵翁顕彰碑があります。

文覚井

四十八瀬川(穴伏川)に水源を求め、途中の丘陵鞍部を開削して風呂谷川上流に落とし込み、この谷川を利用して萩原・笠田中・笠田東に至る一ノ井と、移に至る二ノ井、そして高田に至る三ノ井があります。この三つの用水路を合わせて文覚井と呼称されています。中世の用水路としては工法的にも注目され県史跡に指定されています。なお、文覚井の水路は宝来山神社所蔵重要文化財(附)慶安三年賀勢田荘絵図に描かれていますが、なお、文覚上人が葛城修験行所文蔵の滝で文覚井開削を悟ったとの伝承もあります。



藤崎井

紀の川市藤崎井堰(頭首工)から和歌山市山口まで約24kmに及ぶ農業用水路です。大畑才蔵が紀州藩の事業として、元禄9年(1696)から元禄14年(1701)にかけて行った大規模農業用水路工事。受益面積は900ha。この工事により、畑を水田に変え藩財政の建て直しに貢献しました。頭首工については現在より60mほど上流にあって大型の割石を沈めた上に竹編みの蛇籠を並べたもので、2カ所の船通しと1カ所の魚道がありました。

真土山と越えて

万葉故地と歌碑

「真土山」は、大和と紀伊の国境をなす山であったため、望郷の思いと未知の世界への憧れの心とが交錯して8首もの多くの歌が詠まれました。**白たへに にほふ真土の 山川に
我が馬なづむ 家恋ふらしも**

「飛び越え石」はこの歌の詠まれた地として万葉の人気スポットのひとつです。ここをボンと越えると、そこはもう紀伊国です。

陵山古墳から名古屋廃寺跡へ

5世紀、伊都地域を掌握した豪族の墳墓が橋本駅の北、標高120mの段丘(比高差約25m)南端につくられた円山公園に所在する陵山古墳。6世紀になると各地の有力氏族が横穴式石室を埋葬施設とする円墳を築造しました。相賀大神社裏山の市脇古墳群、隅田八幡神社下方の八幡宮古墳などです。なお、隅田八幡神社が保管してきた人物画像鏡(国宝)は東京国立博物館に預けられそのレプリカ

真土周辺の古墳群

隅田八幡神社

ここに伝わる人物画像鏡は、日本最古の金石文の一つとして国宝に指定されています。10月中旬の例祭は県の無形文化財となっています。枝垂れ桜、花菖蒲も人気です。

利生護国寺

聖武天皇が行基に命じて建てたとされる寺院。本堂は国の重要文化財、本尊の大日如来座像は県指定重要文化財。秀吉ゆかりの太閤駒繫ぎの松があります。また2年に1度、大茶碗でお茶をいただく「大茶盛」が催されます。

「大我野」では紀伊国行幸のお供の一人の詠んだ歌が残されています。**大和には 聞こえ行かぬか 大我野の
竹葉刈り敷き 廬せりとは**

当時は竹の葉を敷いての野宿にちかひ仮寝でした。なお「背山眺望地」からは、およそ25キロ下流にある「背山」を見はるかすことができます。また道々には万葉歌碑が建てられており、これを見ながら歩くのも楽しみの一つです。

を神社で見ることができます。

7世紀後半には橋本市古佐田・神野々・名古屋に白鳳寺院が建立されました。川原寺式軒丸瓦、本薬師寺式軒丸瓦・軒平瓦の採用に共通点があります。古佐田廃寺跡は明確でないが神野々廃寺跡では塔跡、名古屋廃寺跡では整備された金堂跡、塔跡を見ることができます。名古屋墳墓から重要文化財に指定された8世紀後半の奈良三彩の骨蔵器が出土しています。実物は京都国立博物館で保管され、橋本市産業文化会館にレプリカが展示されています。

相賀大神社と市脇相賀古墳群

もとは総社三部明神社と呼ばれ高野山密厳院相賀荘の惣社。境内には県指定の正平10年(1355)の銘が刻まれた砂岩製燈籠が残っています。また、鐘樓の釣鐘は元禄13年(1700)柏原村長兵衛作で橋本市指定文化財。神社裏山には同じく市指定文化財の8基からなる市脇相賀古墳群が所在し、2号墳の横穴式石室玄室を見ることができます。

名古屋廃寺跡(県史跡)

大和街道沿いに法起寺式伽藍配置の塔・金堂の瓦積基壇が復元整備されています。川原寺式、本薬師寺式軒丸瓦を用いた7世紀後半の寺院跡で県指定史跡です。塔心礎は地元で「護摩石さん」と呼ばれ小堂で護られています。

「妻の社」は、紀伊国に 止まず通はむ 妻の社
妻寄しこせね 妻といひながら

と詠まれました。万葉びとはなべて愛妻家が多かったようです。



神野々廃寺



奈良三彩

橋本市産業文化会館展示のレプリカ

神野々廃寺塔跡(県史跡)

神野々西信号の南に巨大な結晶片岩の心礎をもつ県指定の塔跡が残っています。基壇は川原石を用いた乱石積基壇で一辺13m、塔跡と周辺からは7世紀後半の埴伝、川原寺式軒丸瓦、本薬師寺式の軒丸瓦などが出土しています。

名古屋墳墓(県史跡)

昭和38年、和泉山脈の山裾から、総高22.5cmの奈良三彩骨蔵器(重要文化財)が滑石製石櫃に納められ出土。埋納土坑の須恵器から8世紀後半に成人男子火葬骨を葬ったものと考えられています。

- ウォークコース
- 万葉故地
- 国道
- 寺
- 道標
- 県道
- 神社
- 城跡
- 駅
- 見どころ
- 公園・緑地
- 学校



2 妹背山と望む

背山(妹背山)はその優れた景観から万葉集に多く詠まれた山です。萩原駅家推定地、背山を越えてJR西笠田駅まで、ほぼ大和街道を歩きます。南海道の直線指向を感じることができるでしょう。

- 到着** JR西笠田駅 2.4km 48分
- 背山登り口 1.3km 26分
- 宝来山神社鳥居前 2.7km 54分
- 佐野廃寺跡 3.7km 74分
- 流れ井戸 3.5km 70分
- 妙寺墳墓
- 旧葛城館・地蔵寺 0.1km 2分
- 出発** JR高野口駅

龍之渡井

伊都郡・那賀郡の境を流れる四十八瀬川に架かる小田井水路橋。木製の掛樋だったが水害で被害を受けたので、大正8年(1919)、橋長20.5m橋幅5.3m水路幅3.7mの煉瓦造りのアーチ橋に架け替えられた。登録文化財。

宝来山神社

社伝では宝龜4年(773)、和氣清麻呂勳請の八幡社に始まるといふ。京都神護寺領「柿田庄絵図」に八幡宮と堂が描かれている。宝来山神社と神願寺であろう。

丹生都比売神社

神社境内は世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に登録されている。外鳥居、輪橋(太鼓橋)を渡ると中鳥居の向こうに楼門(重要文化財)が見え、奥に本殿がある。白洲正子は神社の鎮座する「天野」の里を神々が住まう高天原にたとえた。

慈尊院

空海の母が讃岐国から訪ねてきて没した地と伝えられている。後世女人禁制の高野山に対して「女人高野」ともいわれ、女性の参拝客が多く、有吉佐和子の小説「紀ノ川」にも安産祈願の乳型を奉納する寺として描かれており、現在もこの信仰は続いている。

旧高野口尋常高等小学校校舎

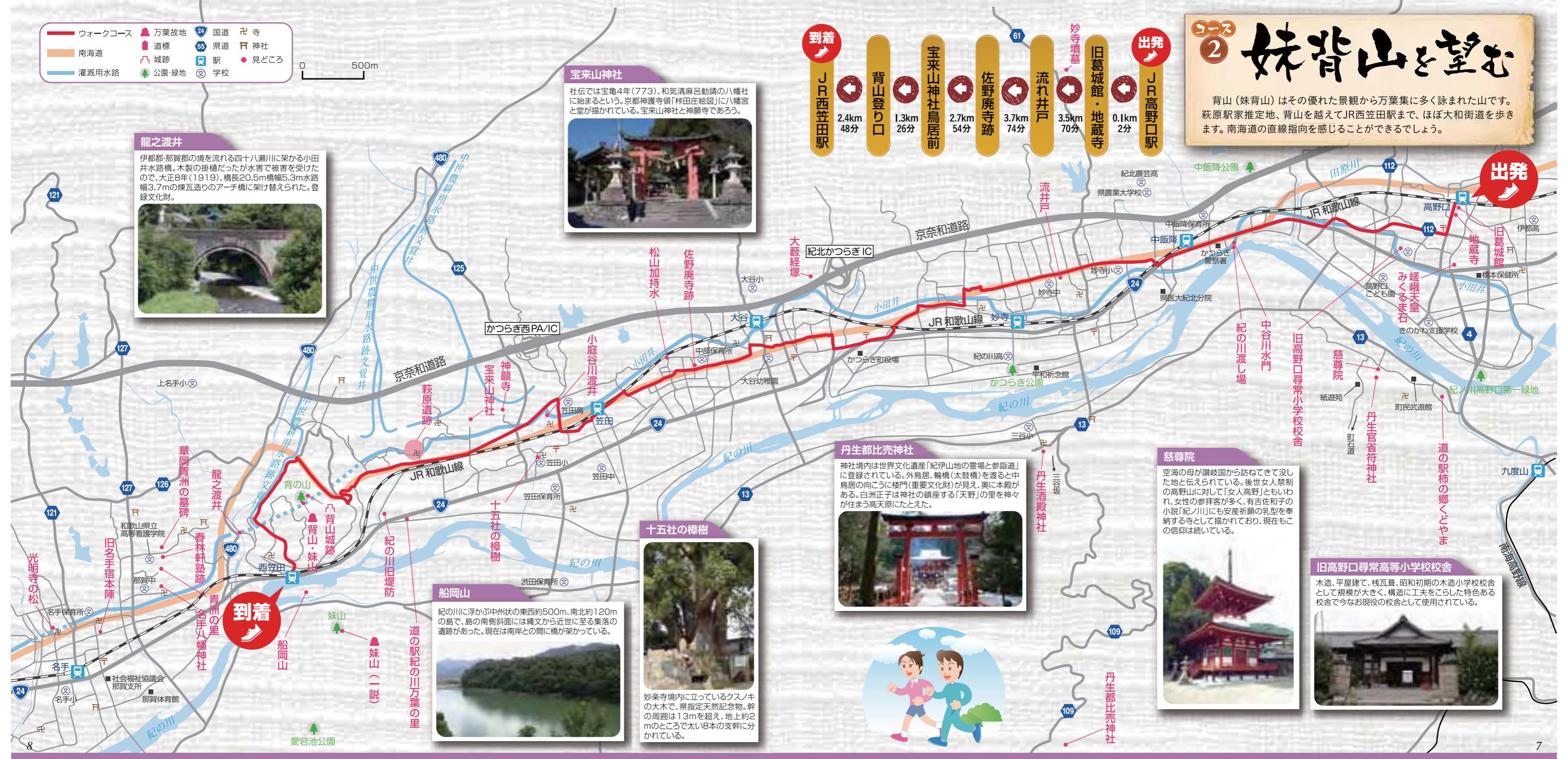
木造、平屋建て、棧瓦葺、昭和初期の木造小学校校舎として規模が大きく、構造に工夫をこらした特色ある校舎で今なお現役の校舎として使用されている。

船岡山

紀の川に浮かぶ中州状の東西約500m、南北約120mの島で、島の南側斜面には縄文から近世に至る集落の遺跡があった。現在は南岸との間に橋が架かっている。

十五社の樟樹

妙楽寺境内に立っているクスノキの大木で、県指定天然記念物。幹の周囲は13mを超え、地上約2mのところまで太い8本の支幹に分かれている。



- ウォークコース
- 南海道
- 灌漑用水路
- 万葉故地
- 道標
- 城跡
- 公園・緑地
- 国道 24
- 県道 65
- 駅
- 学校
- 寺
- 神社
- 見どころ

0 500m

3 紀伊国分寺跡と目指して

古代より何度も行われた天皇・皇族による行幸の旅を想いつつ歩きます。行宮(天皇仮宿泊所)跡を見て紀伊国分寺跡に向かいます。ほぼ大和街道を辿りますが、JR名手駅、粉河駅付近では南海道がそのまま大和街道に受け継がれていることがわかります。

紀伊国分寺跡



天平13年(741)の聖武天皇の詔勅により全国に建立された国分寺の一つ。南海道の国分寺として軒瓦では淡路国分寺と、伽藍配置では讃岐国分寺と共通性をもつ。

長田観音

本尊は如意輪観音で厄除け観音と呼ばれ、毎年2月の初午の日の祭礼は江戸時代から続いており、今も参詣者で賑わう。



- 到着** JR下井阪駅 0.5km 10分
- 紀伊国分寺跡 2.7km 54分
- JR打田駅 2.6km 52分
- 上田井八幡神社 大師井戸 1.3km 26分
- 風市森神社 4.8km 96分
- 旧名手本陣妹背家住宅 1.7km 34分
- 出発** JR西笠田駅

出発

到着

春林軒塾跡

医聖と呼ばれた華岡青洲の住宅兼病院・医学塾であった建物群が復元されている。青洲が初めて麻酔を使用した手術風景、門弟への講義の様子などが再現されている。



粉河寺

『枕草子』に「寺は石山・粉河・滋賀」と記されている古くからの名刹で、西国三十三番観音霊場第三番札所。



旧名手本陣妹背家住宅

江戸時代に名手組の大庄屋を務めた妹背家の邸宅跡で、紀州藩主が参勤交代の折、宿泊するようになり、本陣と呼ばれた。敷地内の主屋・米蔵・南蔵は重要文化財。





コース4 白鳳寺院跡を訪ねる

天武・持統朝には全国に数多くの白鳳寺院が建立されました。紀の川流域も例外でなく伊都・那賀・名草郡で数ヶ寺が建立されました。那賀郡の西国分廃寺跡、北山廃寺跡、最上廃寺跡は四天王寺式伽藍配置を採用し、坂田寺式の単弁8弁軒丸瓦を用いており、天武朝以前の建立とも考えられています。



山口廃寺跡(左)と上野廃寺跡(右)出土の軒瓦

南海道はこれらの古代寺院の南側を西進するもので、雄ノ山峠から紀伊国へ入る道との交点には名草駅家、新萩原駅家が置かれたものとみられ、川辺遺跡、吉田遺跡、山一遺跡など関連遺跡が密に分布しています。

いにしえ人の信仰に触れる

西国分塔跡

紀伊国分寺を過ぎるとまもなく塔心礎が露呈する国史跡西国分塔跡に到着です。塔跡周辺の発掘調査からこの寺院跡は法隆寺式伽藍配置をもつ7世紀中頃創建の古代寺院と考えられ、全体を西国分廃寺跡と呼んでいます。8世紀、紀伊国分寺(僧寺)が興福寺式軒瓦を採用して建立されると西国分廃寺でも興福寺式軒瓦を用いて塔の再整備が行われており、聖武天皇の仏教政策とも関わりをもった有力な寺院であったと考えられます。

名草駅家と萩原駅家

さあ、出発しましょう。西国分塔跡からほぼ南海道にそって西行し山口廃寺跡を目指します。増田家住宅、山崎神社を経たところでウォークコースは南海道の南側を進むことになります。途中雄ノ山峠から南下する道の交点付近は古代交通の要衝地で南海道名草駅家が置かれました。名草駅家の所在地も萩原駅家と同様に明確ではありませんが、周辺には山一遺跡、吉田遺跡など名草駅家が置かれた時期に重なる遺跡が点在しています。『日本後記』弘仁3年(812)には「紀伊国名草駅を廃し、さらに萩原駅を置く」とあり、この頃、名草駅家は廃止されたようですが、新たに萩原駅家が置かれたことが判ります。承和12年(845)の那賀郡司解(下級官庁から上級官庁へ出す書類)に「萩原村野田」の地名が見えることから、かつらぎ町萩原集落周辺に想定されている萩原駅ではなく、交通事情の変化から名草駅家周辺に駅家が造り直されたとする考えが支配的です。



吉田遺跡から名草駅家推定地への登り道

川辺遺跡

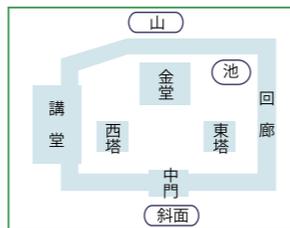
紀の川渡河地点に近い川辺遺跡では、24号バイパス建設工事に伴う発掘調査により8世紀後半に機能していたとみられる幅約8mの道跡が西北西へ30mにわたって検出されています。名草駅家に関係する道路の可能性もあります。

山口廃寺跡

ウォークコースから名草駅家推定地を通り北へ足を延ばすと田園地帯の中に山口廃寺跡の塔心礎を見ることができます。交通の要衝を地盤とする有力氏族により建立されたとみられる古代寺院跡で、半地下式の可能性も残る塔心礎の心柱枿穴の直径は約120cmと県下最大で五重塔の可能性もあり建立氏族の信仰に掛ける情熱が伝わってくるようです。上野廃寺式軒丸瓦のほかに単弁蓮華文軒丸瓦が少数ながら採集されており、創建が遡る可能性もあり飛鳥寺院の地下式塔心礎に近い構造かもしれません。県下で唯一周囲が開発されていない田園地帯にあり今後の調査に期待がかかります。

上野廃寺跡

山口廃寺跡の西方、JR阪和線の北側の丘陵裾部に上野廃寺跡が建立されました。新興住宅地を北へ進み松林寺手前の右側雑木林を西側へ細い登り道を辿れば東西塔、金堂基壇とその礎石が点在しています。薬師寺式伽藍配置では金堂の北側に講堂を配置するが、金堂の北側は高い崖となり堂塔を配置する余地が無いので、講堂は西塔の西側に東を正面に建立されています。基壇が低いため見落とすことがあるので注意が必要です。東西両塔の南側に中門があり、東西に延びる回廊のうち西回廊が講堂に取りつき、さらに金堂の北側で東回廊と繋がり東西塔と金堂を囲んでいます。このように伽藍を見ることができる廃寺跡は県下でも数少ないが、南門と東回廊の一部は周辺の住宅開発で消失してしまっています。上野廃寺式軒丸瓦のほかに新羅様式の軒丸瓦・軒平瓦が出土するところから『日本霊異記』下巻三十にみえる、俗称を三間名干岐ともいう老僧観規の建立になるものと考えられます。



上野廃寺伽藍配置図



コース3 紀伊国分寺跡を目指して

紀伊国分寺跡

国の華として紀の川流域の中ほど、旧那賀郡の高燥な地に営まれていました。発掘調査により七堂伽藍と2町(約220m)四方の寺域が確認されています。天平勝宝8年(756)那賀郡司日置氏が稲1万束を寄進しておりこの頃寺容が整ったと考えられています。堂塔は瓦積み基壇上に興福寺式軒瓦を採用して建立され、巨大な七重塔がシンボルでした。元慶三年(879)落雷により全焼。その後、幾多の盛衰を経て江戸時代には根来寺の末寺となります。跡地は現在史跡公園として整備され南側に国分寺の歴史が学べる紀の川市立歴史民俗資料館が建っています。(宗)国分寺は資料館の南に移転し法灯が受け継がれています。



紀伊国分寺跡



紀の川市歴史民俗資料館

華岡青洲と春林軒塾跡

華岡青洲(1760~1835)は現在の紀の川市平山に生まれ、藩医として勤め、その間に全身麻酔薬「通仙散」を作り、文化元年(1804)に世界で初めて全身麻酔による乳がん摘出手術に成功しました。春林軒塾は発掘調査の結果、居宅兼治療の場であった主屋のほか、病棟・製薬場・講義用の建物を備えた本格的な医療施設であったことが分かり、遺構の配置に基づいて建物が復元されています。

行幸と行宮

「行幸」は「ぎょうこう」あるいは「みゆき」と読み、天皇の旅行を言います。「行宮」は「あんぐう」あるいは「かりみや」と読み、行幸中の天皇が宿泊する仮の宮を言います。万葉時代に紀伊国行幸(天皇の紀伊国への旅)は四度行われました。その多くは紀の川筋の道をとりました。聖武天皇は、神亀元年(724)に玉津島(若の浦)を訪ねます。10月5日に平城京を出発し、7日に「那賀郡玉垣勾頓宮」に宿泊しました。現在の粉河寺の南東の、紀の川の近くの地にあったと考えられています。その後、天平神護元年(765)、聖武天皇の娘の称徳天皇も玉津島に行幸します。父・聖武天皇の通った道筋をほぼ忠実にたどっています。前日は伊都郡に泊まり、翌日「那賀郡鎌垣行宮」に泊まりました。この地は、「玉垣勾頓宮」とほぼ同地か、少し北の山寄りの地と考えられています。なお前日の伊都郡の宿泊地は「大我野」(コース1参照)であったと思われる。



玉垣勾頓宮跡

粉河寺

粉河寺は寺が所蔵する『粉河寺縁起絵巻』(国宝)に宝亀元年(770)に大伴孔子古が創建したと伝えられています。寺の入り口である大門(国重文)は宝永4年(1707)に建てられた三間一戸の楼門です。大門を通り抜けると東西約1km、南北約0.7kmの広大な寺域が広がっています。大門を抜けると参道には不動堂、御池坊、童男堂があり、一段高い中門(国重文)があり、そこを通ると本堂と千手堂が見えます。中門の額に書かれた「風猛山」の文字は紀州藩10代藩主徳川治宝の真筆です。本堂(国重文)は西国三十三番霊場の札所寺院中最大のもので、本堂手前の階段両側の庭園(国名勝)は安土桃山~江戸時代初期に作られています。



粉河寺大門



粉河寺庭園

上野廃寺跡



雑木林の中、処々に礎石が点在する。地形の制限から講堂を西に配置する薬師寺式伽藍配置で東西塔が並び建つ。「靈異記」にいう観風の建立か。

- ウォークコース
- 南海道
- 灌漑用水路
- 万葉故地
- 道標
- 城跡
- 公園・緑地
- 国道
- 県道
- 駅
- 学校
- 寺
- 神社
- 見どころ

0 500m

根来寺大塔



宝塔の姿をもつ木造の塔としてはわが国最大・最古のもので総高は36mある。明応5年(1496)に心柱を立て、天文16年(1547)に完成したことがわかっている。国宝。

到着
JR紀伊駅

3.0km
60分

遍照寺(山口御殿跡)

3.0km
60分

山崎神社鳥居前

0.7km
14分

増田家住宅
桃井家住宅

4.2km
84分

西国分塔跡

1.8km
36分

出発
JR下井阪駅

コース

4

白鳳寺院跡を訪ねる

壬申の乱(672)の後、天武・持統天皇の治世(白鳳時代)には地方の豪族によって多くの寺院が建立されました。南海道が建設された頃には紀伊国にも多くの寺院がありました。南海道を踏襲した直線指向の道を歩き、沿線の寺社および寺院跡を訪ねます。



到着

出発

山口廃寺跡

周囲が開発されていない田園地帯にある。半地下式の可能性も残る塔心礎の心柱納穴の直径は約120cmで県下最大。五重塔であろうか。



増田家住宅

江戸時代初期から山崎組20ヶ村の大庄屋を務めた家柄の住宅。宝永3年(1706)に建てられた主屋(重要文化財)、宝暦9年(1759)の表門(重要文化財)は重厚な風格を持っている。



西国分塔跡

7世紀中頃、那賀郡の最有力氏族による建立で、北山廃寺跡・最上廃寺跡とともに四天王寺式伽藍配置をもつものと考えられる。塔心礎が露出する塔跡は国史跡。



5 紀伊国府と古墳群

古代官道である南海道は紀伊国府(推定地:和歌山市府中)の前を通ります。紀伊国府の遺構は見つかっていません。淡島街道を歩きつつ古墳群を巡ります。南海道を通る古代の駅事も地方豪族が造った古墳群を遠くに眺めていたかもしれません。

- ウォークコース
- 南海道
- 灌漑用水路
- 万葉故地
- 道標
- 城跡
- 公園・緑地
- 国道
- 県道
- 駅
- 学校
- 寺
- 神社
- 見どころ

- 到着** 南海八幡前駅 2.3km 46分
- 車駕之古址古墳 0.8km 16分
- 大年神社 4.4km 88分
- 大谷古墳 2.4km 48分
- 伊達神社 1.9km 38分
- 丹生神社の樟樹 2.6km 52分
- 聖天宮 2.1km 42分
- 出発** JR紀伊駅

車駕之古址古墳

周濠を含めた主軸長約120mの前方後円墳。葺石をもち2~3段に築成された墳丘は削平を受け埋葬施設は不明だが金製の勾玉が出土。



大年神社

貴志荘6ヶ村の産土神で、江戸時代には和歌山城から北西にあたるため「乾の宮」といわれていた。神社境内の「岩神さん」とよばれる大岩は眼病に効果があるといわれている。



大谷古墳

主軸長約70mの前方後円墳。大陸、朝鮮半島ゆかりの馬冑・馬甲を副葬するところから雄略朝のころ半島へ渡った武人の墓か。



到着

出発

釜山古墳

県指定史跡。車駕之古址古墳、茶臼山古墳とともに木ノ本古墳群を形成する。周濠をもつ直径約40mの大型円墳。5世紀。



伊達神社

かつての紀三所社のひとつ。延喜式神名帳の伊達神社であろう。園部、大谷、平井、善明寺4ヶ村の産土神で園部神社とも呼ばれる。



聖天宮(府守神社)

聖天宮は国府の守護神であったと考えられ、府守神社ともいわれる。社殿は美麗で以前は八幡神社と伝えられ、府中八幡の通称もある。神社を中心に紀伊国府の政庁があったと考えられている。





コース6 加太浦八景を訪ねる

交通の要衝 加太

紀伊南海道の西端、淡路国への渡津の地には賀太駅家が置かれました。駅家の位置は明確ではないが奈良時代土器の散布をみる南海電鉄加太駅周辺とみられ、湊は泊谷、友ヶ島汽船の船着場あたりと考えられています。



平安時代以降は葛城修験序品行場の拠点として多くの修験者が訪れました。その拠点であった伽陀寺は秀吉の紀州攻め等で退転するが、その後も本山派等の修験者によって行場の整備が進められ、迎之坊は行者を接待する施設として、加太春日神社は修験者の安全祈願の社として重要な役割を果



たしました。友ヶ島汽船が通る中ノ瀬戸に臨み役行者像を山頂に祀る虎島の一枚岩には友ヶ島5行場、観念窟、序品窟、関伽井、深蛇池、剣池の名が刻まれています。江戸時代中期以降、全国をめぐる淡島願人等により淡島信仰が広がり淡島参詣がふえ、かつての南海道は淡島街道とも呼ばれるようになり消防署横、加太春日神社横などに道標が整備されました。



大阪湾への重要な航路であった紀淡海峡には、幕末期、外国船の脅威に対処すべく加太、友ヶ島をはじめとする紀州沿岸に台場や狼煙場が設けられました。明治5年(1872)友ヶ島灯台が設けられたが、大阪湾防備のため紀淡海峡には由良要塞が整備されました。加太にも加太砲台、深山第1、第2砲台、田倉崎砲台などが設けられました。なお、県指定天然記念物常行寺の柏楨や国登録文化財旧加太警察署などほかにも見るべきものも多くあります。



加太と万葉集

紀伊国における南海道の西の終着点は加太でした。万葉びとはこの地において、憧れの海を見ます。四方に海のない世界に住む、大和の万葉びとにとつて、海は未知の世界でした。

藻刈り舟 沖漕ぎ来らし 妹が島
形見の浦に 鶴翔る見ゆ

妹が島は「友ヶ島」のことと考えられます。形見の浦は所在が分かりませんが、歌の表現からすれば友ヶ

島内のどこかの浦を言ったのでしょうか。「形」が「潟」を意味するとすれば、現在の加太(潟)とも強く関わっているでしょう。沖合から近づいてくる舟を警戒して、鶴は友ヶ島の上を大きくゆったりと旋回しています。岸边に立つ作者は、鶴の動きをみて、藻刈り舟が島に近づいていることを想っているのです。広々とした海と空と島と鶴と、大和からの旅人には見飽きることのない眺めでした。

紀伊国の 鮑等の浜の 忘れ貝 我は忘れじ 年は経ぬとも

鮑等の浜は、淡島神社から南へ1キロほどの田倉崎のことだと考えられています。「忘れ貝」は二枚貝の片方が離れてしまった貝で、恋のせつなさを忘れさせてくれる貝でした。でも一途な恋心の前には無力な貝殻に過ぎませんでした。



コース5 紀伊国府と古墳群

府中地区で紀伊国府のおかれた高所にいたります。国府域は明確ではありませんが府守神社周辺に国衙が置かれていたものと推定されます。直川から園部地区では直川廃寺跡、丹生神社、射矢止神社、大同寺、伊達神社などの傍らを西進します。六十谷から平井地区にかけては古墳時代の遺跡が多く存在します。大谷古墳、横穴石室をもつ園部丸山古墳のほか、朝鮮半島南部の陶質土器あるいはその影響を受けた初期須恵器が出土した六十谷古墳、鳴滝遺跡、楠見遺跡は海外文化の窓口であった平井津周辺に展開します。さらに西進すれば岸村行宮推定地、大年神社を経て木ノ本地区では土入川を航行する船舶から目視できた釜山古墳群とも呼ばれる3基の大型古墳である釜山古墳、車駕之古址古墳、茶臼山古墳にいたります。



紀伊国府について

国府とは律令時代に設置された各国々の役所で今の県庁に当たります。全国の国府の所在した郡名を書いた平安時代の書物が残っています。国府はふつう「こう」と呼ぶことが多いです。所在した場所の地名は「府中」(徳島県ではこの地名を「こう」と読みます)「国府」「国衙」などがあります。所在した郡の中でそのような地名の場所を国府跡と考え

ることができます。その後発掘調査で国府の様子が分かるようになってきました。その結果、全国の国府では、政治の中心となる政庁は、中心となる正殿が南面して建てられ、その前後に前殿や後殿を置くが、いずれかを欠いていることもあります。正殿の左右前方に南北棟の東・西脇殿が対称的に配置され、これらのあいだに広い前庭をつくり、前庭には玉石を敷くこともありました。また南正面には南門が設けられ、他の3面にも門があったことが分かっています。政庁近辺には国府の役人(国司等)の官舎や倉庫群等がありました。紀伊国の国府は名草郡(現在の和歌山市)府中であつたと考えられます。和歌山市府中の聖天宮(府守神社)を中心としてその西一帯の地名「平林」や、南の影臨寺付近の「御館」という地名が残る付近に政治を行う政庁があつたのではないかと考えられています。府守神社の周辺ではボーリング調査が行われており、8～9世紀に属する遺物が神社以東で高密度に分布している可能性があるといわれています。天慶2年(878)に9月に台風が襲来し、紀伊国の国府の政庁・学校・21の官舎が壊れたとの記録が残っていますがその建物群の建っていたところはまだわかっていません。



平井津

平安時代中頃の永承3年(1048)の記録に平井津と吉田津という湊の名前があります。紀の川上・中

流の物資輸送や古代の租税の海上輸送の要の湊であったことが分かります。物資としては、穀(稲穂)や木材を輸送していたことがわかります。平井津は今の和歌山市平井で淡路街道の南付近に想定されます。紀の川は当時その南、現在の県道7号線付近を流れていたのだでしょう。南海道は津の北を通っていたことが推定できます。

鳴滝倉庫群遺跡

古墳時代の巨大倉庫群遺跡で、和泉山脈の南麓の丘陵を削平したうえで、西側に5棟、東に2棟掘立柱建物が整然と配置され、最大のもは10×8mの建物が見つかりました。5世紀前半から中頃のきわめて短期間に存在し、柱を抜き取っていることから人為的に壊されたようです。だれが作ったかは意見が分かれますが、紀の川北岸の湊や道路を考えると、知っておきたい遺跡です。なお、建物の復元模型と遺物は県立紀伊風土記の丘に展示されています。



写真提供：和歌山県立紀伊風土記の丘

岸村行宮推定地

天平神護元年(765)10月、称徳天皇は玉津島(和歌の浦)に幸します。往路は紀の川筋を通り、復路は孝子峠を越えて和泉国を経て平城京に還ります。『続日本紀』の記事から、玉津島→「海部郡岸村行宮」→「和泉国日根郡深日行宮」というルートを取ったことが分かります。

- ウォークコース
- 万葉故地
- 国道
- 神社
- 南海道
- 道標
- 県道
- 神社
- 灌漑用水路
- 城跡
- 駅
- 学校
- 公園 緑地
- 見どころ

0 500m



- 友ヶ島行場五所の額
- 虎島堡壘跡
- 観念窟
- 虎島
- 関伽井
- 序品窟
- 神島
- 剣池
- 深蛇池
- 友ヶ島第5砲台跡
- 友ヶ島第4砲台跡
- 友ヶ島第3砲台跡
- 友ヶ島第2砲台跡
- 友ヶ島第1砲台跡
- 友ヶ島燈台
- 友ヶ島第1砲台跡
- 友ヶ島第2砲台跡
- 友ヶ島第3砲台跡
- 友ヶ島第4砲台跡
- 友ヶ島第5砲台跡
- 妹が島・形見の浦

友ヶ島遠望

休暇村や深山第1砲台から加太の瀬戸を挟んで地ノ島、沖ノ島を、遠くには由良ノ瀬戸を挟み淡路島を眺望する。万葉・形見の浦を満喫できる。

淡島神社

もとは神功皇后伝承をもつ友ヶ島の神島に祀られていて仁徳朝に現地に遷されたという。延喜式神名帳の加太神社であろう。離漁し、針供養で参拝者が多い。

友ヶ島第3砲台跡

紀淡海峡防備のため、明治22年以降、沖ノ島に5砲台、虎島に1堡壘が築造された。最大規模を誇る第3砲台は28cm榴弾砲8門を備えた。

MAP A 加太小学校周辺

- 旧加太警察署庁舎
- 常行寺の柏楨
- 西消防署加太出張所
- 加太中学校
- 加太小学校
- 加太郵便局
- 光源寺
- 加太春日神社
- 観念寺
- 阿弥陀寺
- 新町温泉
- 加太駅

コース 6 加太浦八景と訪ねる

南海道は紀伊国を出て、四国へ続いていきます。加太は、淡路・四国への渡津(わたんど)であり、葛城修験の起点でもあります。主に淡島街道を通り、一部県道7号を歩きます。海に臨む加太の景観と名所・旧跡などの歴史スポット『加太浦八景』を楽しめます。

出発

南海八幡前駅 1.6km 32分

木本八幡神社 2.6km 52分

射箭頭八幡神社 2.0km 40分

塩地蔵堂跡 6.0km 120分

南海加太駅 2.7km 54分

到着

大崎 2.7km 54分

到着

大崎

賀太駅家推定地

加太海岸

加太海水浴場

加太

森林公園

大崎(二説)

田倉崎

田倉崎砲台跡

淡島神社

加太砲台跡

田倉崎砲台跡

見晴らしの丘

鉢巻山

観音堂

行者堂

市立少年自然の家

磯の浦海水浴場

磯の浦公園

磯ノ浦

二里ヶ浜

河西公園

河西緩衝緑地

八幡前

西ノ庄

南海加太線

八幡小

西脇中

西脇小

河西中

中松江

西松江緑地

宮舞山

木本八幡宮

木本八幡宮 宮原

和歌山看護専門学校

北高西校舎

和歌山 労災病院

木本小

警察学校

加太春日神社

天道根命の頓宮に始まり、鎌倉末に春日大神を祀ったという。加太の産土神。重要文化財の社殿は和歌山城代築山重治寄進。5月の海老祭りは見ごたえがある。

木本八幡宮

応神天皇の頓宮に始まるという。県指定文化財の社殿は敷幡山にあり藤の宮原権殿で1月20日の祭礼日に木ノ本獅子舞(県指定文化財)が奉納される。

行者堂

葛城修験28宿の始まりの地。5ヶ所の行場がある友ヶ島を望む阿字ヶ峰に建つ。聖護院等の修験者は迎之坊、加太春日神社を訪れ行者堂に参る。

コース7 紀見峠越え

平安時代のはじめには南海道は紀見峠を越えて紀伊国に入るようになり、その後河内方面と紀伊を繋ぐ重要な街道になりました。橋本まで主に国道371号沿いに、峠越えは古く往來のあった旧街道を歩きます。



応其寺

天正13年(1585)に古佐田村(現橋本市古佐田)の南方の荒地を開発して、橋本の町を開いた高野山の客僧の住居として建立された。



陵山古墳

橋本駅の北、標高120mの段丘(比高差約25m)南端につくられた円山公園に所在する。幅約6mの周濠をもった直径約46mの伊都地域最大の大型円墳。5世紀末から6世紀初頭の築造で埋葬施設は初期の横穴式石室。



紀見峠

和歌山県と大阪府の境にあって、古代から交通路として開けた。慶安元年(1648)に紀州藩の伝馬所が設けられ、物資輸送にたずさわるものの住居や茶店があった。「高野女人堂江六里」の石標が残っている。



東家渡場大常夜燈籠

紀の川の東家渡し場跡に建つ灯籠で高さは約4.8m、文化11年(1814)に建立された。



ウォークコース

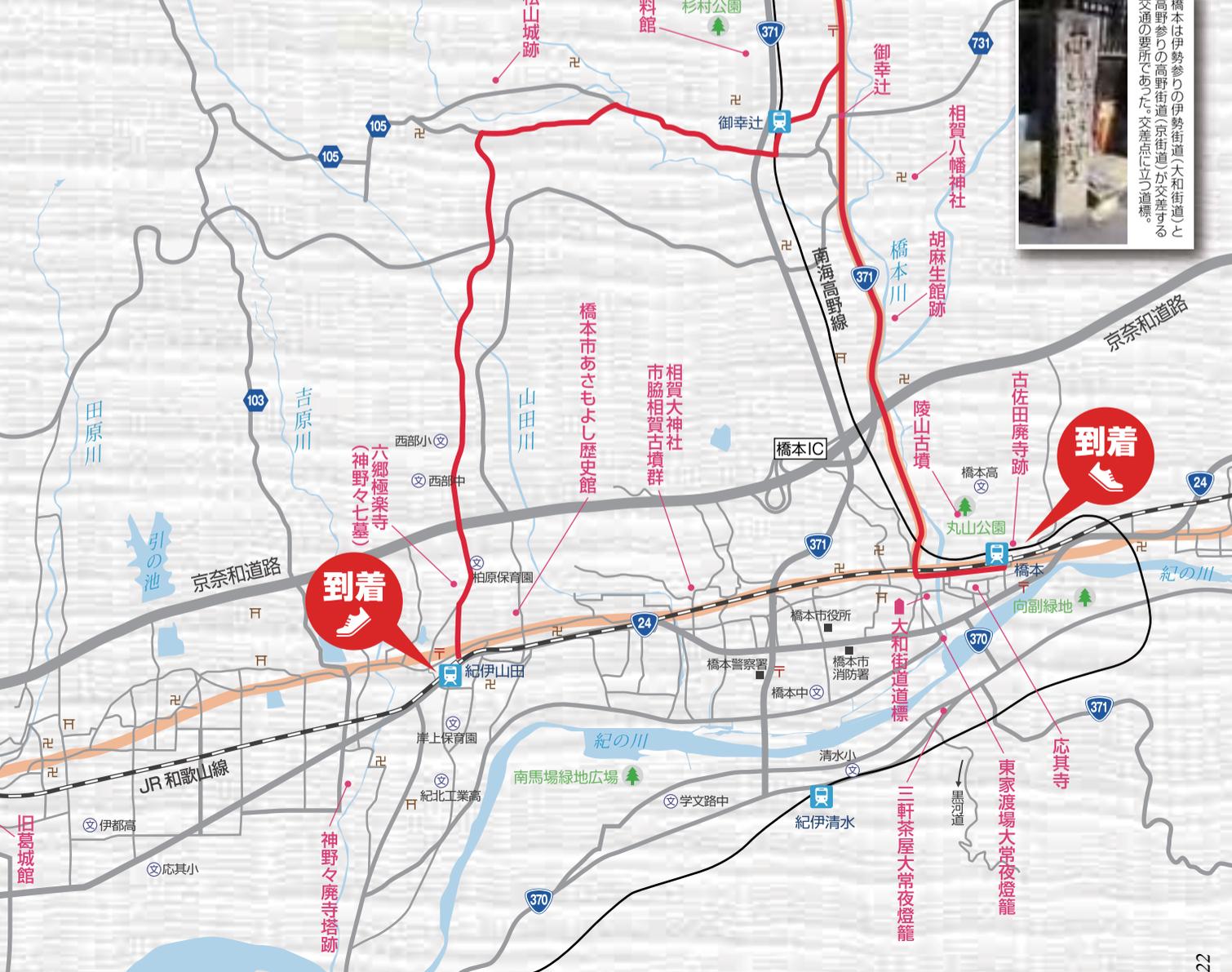
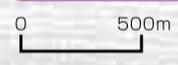
- 南海道
- 灌漑用水路

シンボル

- 万葉故地
- 道標
- 城跡
- 公園・緑地
- 寺
- 見どころ

交通

- 国道
- 県道
- 駅
- 学校
- 神社



大和街道道標

橋本は伊勢参りの伊勢街道(大和街道)と高野参りの高野街道(京街道)が交差する交通の要所であった。交差点に立つ道標。





コース 8 鍋谷峠・榎尾山

難波京からの南海道

7世紀半ばに充実した国家体制を整えた唐が朝鮮半島にあった高句麗への侵攻を始めると、周辺諸国では中央集権国家体制の確立と国内統一の必要に迫られることになりました。そのころ倭(日本)では、蘇我入鹿が厩戸王(聖徳太子)の子の山背大兄王を滅ぼして権力集中をはかりましたが、中大兄皇子は蘇我倉山田石川麻呂や中臣鎌足の協力を得て、王族中心の中央集権をめざし、大化元年(645)に蘇我蝦夷・入鹿を滅ぼしました。(これを乙巳の変と呼びます。)

そして皇極天皇の譲位を受けて王族の軽皇子が即位して孝徳天皇となり、大王宮を飛鳥から難波に移して政治改革が進められました。孝徳天皇の時代(在位645～654年)の諸改革は大化の改新といわれています。

乙巳の変の翌年正月に改新の詔が出され、その第2条に「畿内国司を置くこと」が定められています。畿内とは、律令制で定められた地方制度上の特別地域を指し、国家が直接支配する地域として特殊な位置づけにあり、律令制度では、大和・摂津・河内・山背の4国(後に和泉の国が分置されてからは5国)が畿内とされました。改新の詔に見える畿内ではまだ国の境界が定まっていなかったようで、その範囲を次のように記しています。

「畿内は東は名壜(なばり)の横河(三重県名張市)より以来、南は紀伊の兄山より以来、西は赤石の櫛淵(兵庫県明石市)より以来、北は近江の狭々波の合坂山(滋賀県大津市)より以来を畿内国とする」

詔は難波京で発布されたもので、難波からの道と考えた時、南の兄山は難波京からの道路を目印に設定されたものと考えられます。その道路は難波京から南へ難波大道を進み、のちの日部駅(堺市草部)から直線指向で南に向かい和泉市国分町から岸和田市父鬼町を通って鍋谷峠を越え、紀伊国に入ったのでしょう。それが当時の官道(まだ南海道の名称はなく、建設には至っていないと考えられますが)であり、それが南は紀伊兄山と規定された畿内の範囲とされたのでしょう。

その後、天武天皇12年(683)前後と聖武天皇の天平16年(744)に短期間ですが難波京は都として機能しています。その時の南海道は難波京から洪川道を経て河内国府(藤井寺市)に至り、そこから東高野街道を南に向かい、紀見峠を経て紀伊国では紀の川の北岸、平城京から通じていた南海道を使用していたと考えられます。

修験の道

修験の峰 葛城山.....奈良時代に役行者(役小角)によって開かれたといわれる葛城の大峰は、修験の行場として最も畏敬された山であり、全国の山伏にとって一度は入峰すべき山でした。平安時代になり修験道は全国の峰に発展して

きました。葛城の峰とは犬鳴山七宝瀧寺の智航上人が嘉永2年(1949)に書かれた『葛嶺雜記』にも「惣じて紀泉河大の四か国に跨りて行程二十八里の総名」と記されています。今の和泉・金剛の両山脈はすべて葛城山と呼んでいたのです。その主峰金剛山(標高1125m)も、もとは「葛木山」と呼び、山頂には葛木坐神社が祀られています。

葛城山と役行者

修験道とは原始的山岳信仰と仏教の密教的要素があわされた宗教と説かれていますが、その創始は白鳳時代の役行者(役小角。生没年不詳)です。役行者は、葛木山で修業し、呪術者として鬼神を使う能力があったが、弟子に譏言されて文武天皇3年(699)に伊豆の国に流されました。しかし、2年後には赦免されのちには、賀茂の姓を賜っています。平安時代の書物では仏法を敬い晩年には修業によって孔雀の呪法を体得したと記されています。

やがて金剛山転法輪寺と山上ヶ岳の金峯山が隆盛となり、平安時代に藤原道長は山上ヶ岳の山頂に経筒を埋納しました。その頃から大峰・葛城の峰を巡行し行所で行する姿が見られるようになったようです。

葛城二十八品の経塚

役行者は、葛城の峰を仏法の世界と見えて、法華経八巻二十八品をそれぞれ経塚に入れて埋納しました。この二十八品の経塚は友ヶ島の序品屈に始まり、葛城の峰を西から東へ埋納し、第二十八品は大和川の亀ノ瀬の経塚に終わるものです。榎尾山施福寺は二十八品の埋納の最後に収めたので「巻尾山」の山号になったと伝えられています。我が国の経塚埋納は平安時代末に盛んになりました。それは、釈迦入滅から仏法でいう56億7千万年後に弥勒菩薩として生まれ変わり、我々を救ってくれるがそれまで大乘仏教の経典を経塚に埋納しておこうとするものです。野辺の地藏さんは、弥勒菩薩が出現するまで釈迦如来に代わりに我々を救う尊像として信仰されてきました。

実際の経塚は一樣ではなく、自然石・石祠・五輪塔・石畳・印之松・切立塔・法輪形など様々で、自然石や石祠などにはバク(釈迦如来)・カーンマン(不動明王)などの種子が刻まれている場合が多いです。

修験者はこの経塚に勤行し、その証として祈願文と年月日、修験派名を記した木札を奉納します。この木札を「碑伝」と呼び、葛城の経塚や行所にはそれぞれの修験派を記した碑伝が置かれています。奈良・平安時代に紀の川北岸を南海道が整備された頃和泉山脈の山中を東西に結ぶ修験者の道が通り、紀泉国境を南北に通じていた道路が接する峠では人々の交流もありました。



榎尾山への道



コース 7 紀見峠越え

長岡京時代の南海道

長岡京は延暦3年(784)に平城京から移った都で延暦13年(794)に平安京に移るまで京都府向日市・長岡京市・京都市南部に京都ができていました。

長岡京時代の南海道は山崎駅(京都府大山崎町)で淀川を渡り、そこから東高野街道(河内長野市で西高野街道と合流し高野街道の名称となります)を南へ進み、紀見峠を越えて橋本市で奈良時代の紀の川北岸の南海道へと通じていました。

弘仁2年(811)に萩原・名草・賀太の三つの駅が廃止されていますからその時まで、紀見峠を越える南海道が存在したのでしょう。

慈尊院

空海の母が没した地と伝えられ、空海はその廟所に弥勒菩薩像を安置したとされています。「女人高野」ともいわれ、有吉佐和子の小説「紀ノ川」にも安産祈願の乳形を奉納する寺として描かれており、現在もその信仰が続いています。慈尊院は空海が高野山を開山したおり、山麓の拠点として開かれ、以来高野山の発展とともに整備されてきました。別に「高野政所」とも呼ばれ、高野山が持っていた寺領の支配拠点でした。寺院内の弥勒堂(国重文)は鎌倉～室町時代の建築で中に木造弥勒座像(国宝)が安置されています。

なお、弥勒堂は文明年間(1469～87)に水害を予測して、現在紀の川河川敷となっている嵯峨浜北方付近から堂のみを現在地に移したと伝えられています。築地塙(県指定文化財)は文明年間に移転後に築造されたもので北門(県指定文化財)とともに「高野政所」存在当時の形式を残しています。寺内では、寛永元(1624)再建の多宝塔(県指定文化財)があります。

高野山への道

高野山は和歌山県高野町にある山で弘仁7年(816)に空海が嵯峨天皇の許可を得て道場と僧房をはじめ堂塔を建て(最初は山全体が金剛峯寺と呼ばれていました)以来、真言宗の本拠地として栄えています。

高野山への参詣の契機は平安時代中頃からの摂関家・王家の参詣です。

京都(当時は平安京)からの参詣のルートは、摂関全盛期には「和泉路」、白河院政期には「大和路」、鳥羽・後白河院政期には「河内路」がそれぞれ多く採用されていたことが知られています。

和泉路は大阪府南部では熊野街道(現在は熊野古道と称されています)を南下して雄ノ山峠を越えて紀の川筋に達するルートです。和泉路は平安時代の南海道を歩き、紀の川筋では埴前(吐前)から船で紀の川を遡り、高野政所のあった慈尊院から山に上っています。

大和路は大和盆地のほぼ中央を貫く「下ツ道」を南下して吉野川・紀の川筋に達するルートで奈良時代の南海道を歩いています。河内路は堺市までは熊野街道を南下しますが、そこから南東に西高野街道を進み、河内長野市で東高野街道と合流して、紀見峠を越えて、高野政所に至るルートで、長岡京時代の南海道が使用されています。

高野七口

庶民の高野山参詣は中世から盛んになりますが、参詣者が巡った高野山への道で、主な七つの道(黒河道、高野街道(京街道とも呼ばれています)、町石道(麻生津道が途中で合流)、有田・龍神道、相ノ浦道、熊野古道小辺路、大峰道)が高野七口と呼ばれています。その名前は戦国時代頃からはじまったようです。ウォークコースでは、黒河道、高野街道(京街道とも呼ばれています)、町石道(麻生津道が途中で合流)へ入り口を紹介しています。

丹生都比売神社

神社の祭神は丹生都比売神といえます。丹生都比売神は神功皇后が新羅に出兵した際に皇后にお告げを与えました。それにより呪術力のある赤土を得た皇后は勝利したので、「紀伊国管川藤代之峯」(現高野町筒香)に鎮座という伝承が残されています。この赤土とは硫化水銀のことで、神社はこの採掘や生産にかかわる丹生氏の氏神としての性格や、筒香が丹生川の水源に当たることから水分の山神の性格が考えられます。

平安時代の文書では丹生都比売神はイザナミ・イザナギ両神の子で、天照大神の妹にあたり、「紀伊国伊都都奄太村石口」(現九度山町慈尊院)に降臨し、紀伊・大和両国に水田を開いた後に天野の里に鎮座したと伝えられています。

空海の高野山開創に伴って、丹生神は高野山との関係を深めていきました。10世紀頃成立の伝承では空海が丹生神から土地を譲られたとするものと、高野明神に高野山を案内され、そこで丹生神から土地を譲られたとするものがあります。高野明神は狩場明神とも称し、丹生神の子どもになる神とされ、この神が獵師に姿をかえて白・黒2頭の犬を連れて空海を案内したとされています。2神が高野山の守り神として信仰され、のちに高野山を復興した雅真によって、天徳元年(957)に高野山に明神社(御社)が創建されました。春日造の本殿(国重文)は、文明元年(1469)再建の2棟を中心に4棟が並び、二重入母屋造の楼門(国重文)は、明応8年(1499)に再建されたことが分かっています。

丹生官省符神社

慈尊院の石段を上り詰めた高台にあり、古くから慈尊院と一体となった神社で官省符社の総氏神でした。神社本殿(国重文)は室町時代後期・末期の様式で、旧社地から移転した直後の面影を伝えて

横尾山施福寺

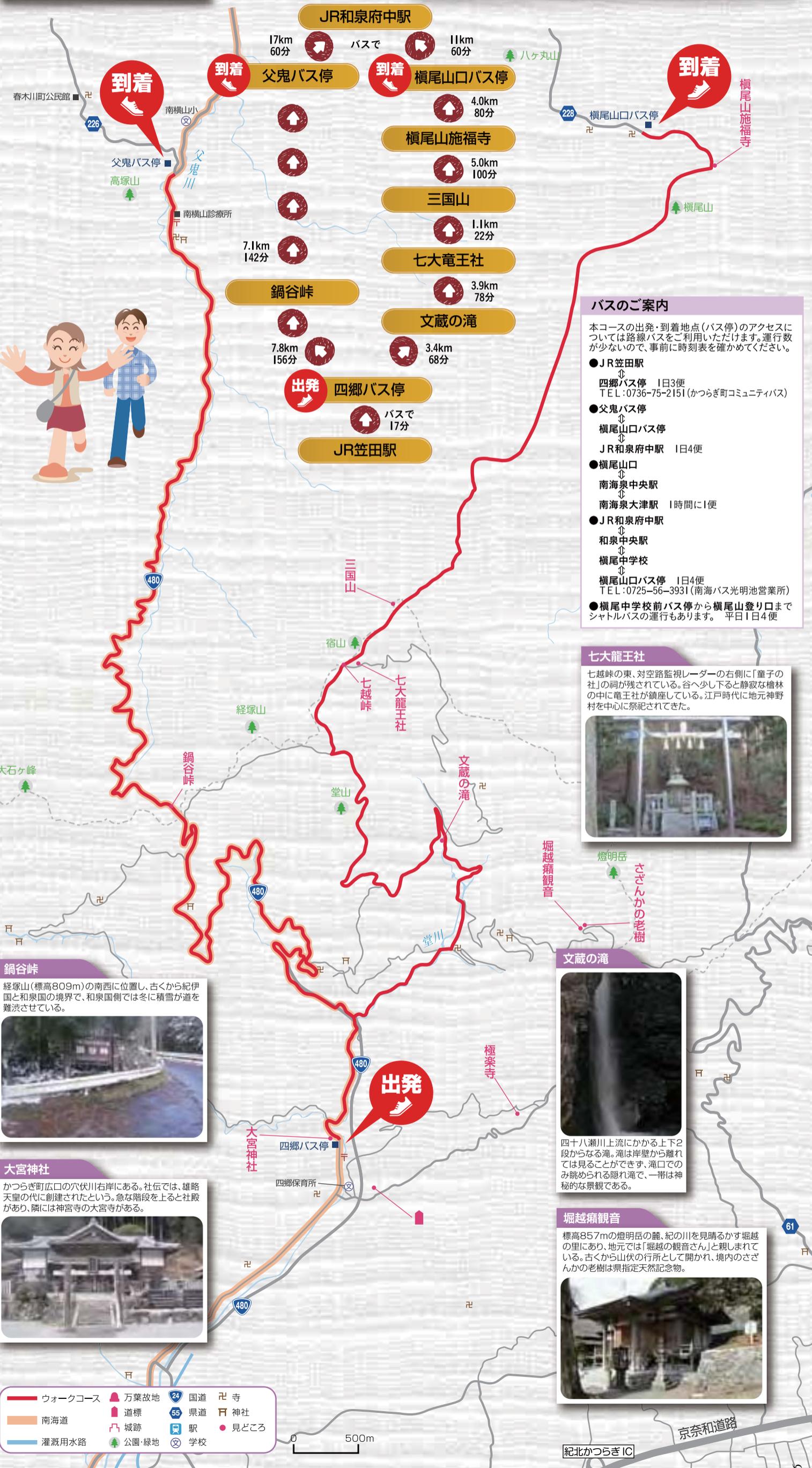
古くは横尾山寺と呼ばれた山岳寺院で、縁起では欽明天皇の時代に播磨国の行満上人が創建したとされている。本尊は千手観音で、西国三十三所第4番札所。



コース 8 鍋谷峠・横尾山

大化の改新後に発布された詔では畿内の南限は兄(背)山にありました。当時の都、難波京から鍋谷峠を越える道は背山に通じています。JR笠田駅からバスで四郷バス停まで移動、鍋谷峠を越えて父鬼バス停までの南海道(国道480号)を歩きます。

また、修験者・巡礼の道である横尾山施福寺に至る尾根沿いの道を別コースとして紹介しています。



バスのご案内

本コースの出発・到着地点(バス停)のアクセスについては路線バスをご利用いただけます。運行数が少ないので、事前に時刻表を確かめてください。

- JR笠田駅
 - ↓
 - 四郷バス停 1日3便
 - TEL: 0736-75-2151 (かつらぎ町コミュニティバス)
- 父鬼バス停
 - ↓
 - 横尾山口バス停
 - ↓
 - JR和泉府中駅 1日4便
- 横尾山口
 - ↓
 - 南海泉中央駅
 - ↓
 - 南海泉大津駅 1時間に1便
- JR和泉府中駅
 - ↓
 - 和泉中央駅
 - ↓
 - 横尾中学校
 - ↓
 - 横尾山口バス停 1日4便
 - TEL: 0725-56-3931 (南海バス光明池営業所)
- 横尾中学校前バス停から横尾山登り口までシャトルバスの運行もあります。平日1日4便

七大龍王社

七越峠の東、対空路監視レーダーの右側に「童子の社」の祠が残されている。谷へ少し下ると静寂な檜林の中に龍王社が鎮座している。江戸時代に地元神野村を中心に祭祀されてきた。

鍋谷峠

経塚山(標高809m)の南西に位置し、古くから紀伊国と和泉国の境界で、和泉国側では冬に積雪が道を難渋させている。

大宮神社

かつらぎ町広口の穴伏川右岸にある。社元では、雄略天皇の代に創建されたという。急な階段を上ると社殿があり、隣には神宮寺の大宮寺がある。

文蔵の滝

四十八瀬川上流にかかる上下2段からなる滝。滝は岸壁から離れては見る事ができず、滝口のみ眺められる隠れ滝で、一帯は神秘的な景観である。

堀越禰観音

標高857mの燈明岳の麓、紀の川を見晴らす堀越の里にあり、地元では「堀越の観音さん」と親しまれている。古くから山伏の行所として開かれ、境内のさざんかの老樹は県指定天然記念物。

- ウォークコース
- 南海道
- 灌漑用水路
- 万葉故地
- 道標
- 城跡
- 公園・緑地
- 国道 24
- 県道 55
- 駅
- 学校
- 寺
- 神社
- 見どころ

コース 9 雄ノ山峠から布施屋へ

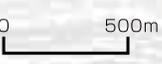
雄ノ山峠の道は平安時代後期の南海道であったとされています。熊野詣の道、あるいは紀州街道と呼ばれる道とほぼ重なります。ウォークは、JR山中溪駅から今では熊野古道とされる道を王子跡などの古代、近世の歴史スポットを巡りつつ、紀の川まで出て、JR布施屋駅まで歩きます。



- 出発** JR山中溪駅
- 1.6km 32分
- 日本最後の仇討ち場碑**
- 0.5km 10分
- 中山王子跡**
- 2.1km 42分
- 雄ノ山峠**
- 1.8km 36分
- 山口王子跡**
- 2.0km 40分
- 紀州(大坂)街道山口宿**
- 2.0km 40分
- 川辺橋**
- 1.7km 34分
- 吐前王子跡**
- 0.4km 8分
- 到着** JR布施屋駅

ウォークコース
 南海道
 灌漑用水路

万葉故地 国道
 道標 県道
 城跡 駅
 公園・緑地 学校
 寺 神社
 見どころ



小町堂跡

和歌山市中筋の小野寺の境内地にある。寺伝では小野小町(生没年不詳。平安時代の女流歌人)が熊野詣のときに滞在し、肖像を寺に遺したという。



山口神社

和泉山脈の麓、和歌山市谷に所在。一の鳥居から約400mで本殿に着く。鬱蒼とした森林の中に重厚な山王権現と春日明神の社殿が建つ。



吐前王子跡



熊野九十九王子の一つ。跡地は紀の川南岸の自然堤防上にあり、周辺の水田よりも一段高く、王子社跡の面影を留め、わずかに砂質岩の一石五輪塔と石灯籠の一部が残る。

力侍神社

祭神は天手力男命で、神社の名前は手力男の称から力士の称を生じ、一転して力侍の文字を用いたと伝える。右に力侍神社本殿、左に摂社八王子王子神社を記る。両社殿は建立年代を示す記録はないが様式技法から16世紀末の建立と推定されている。県指定文化財。



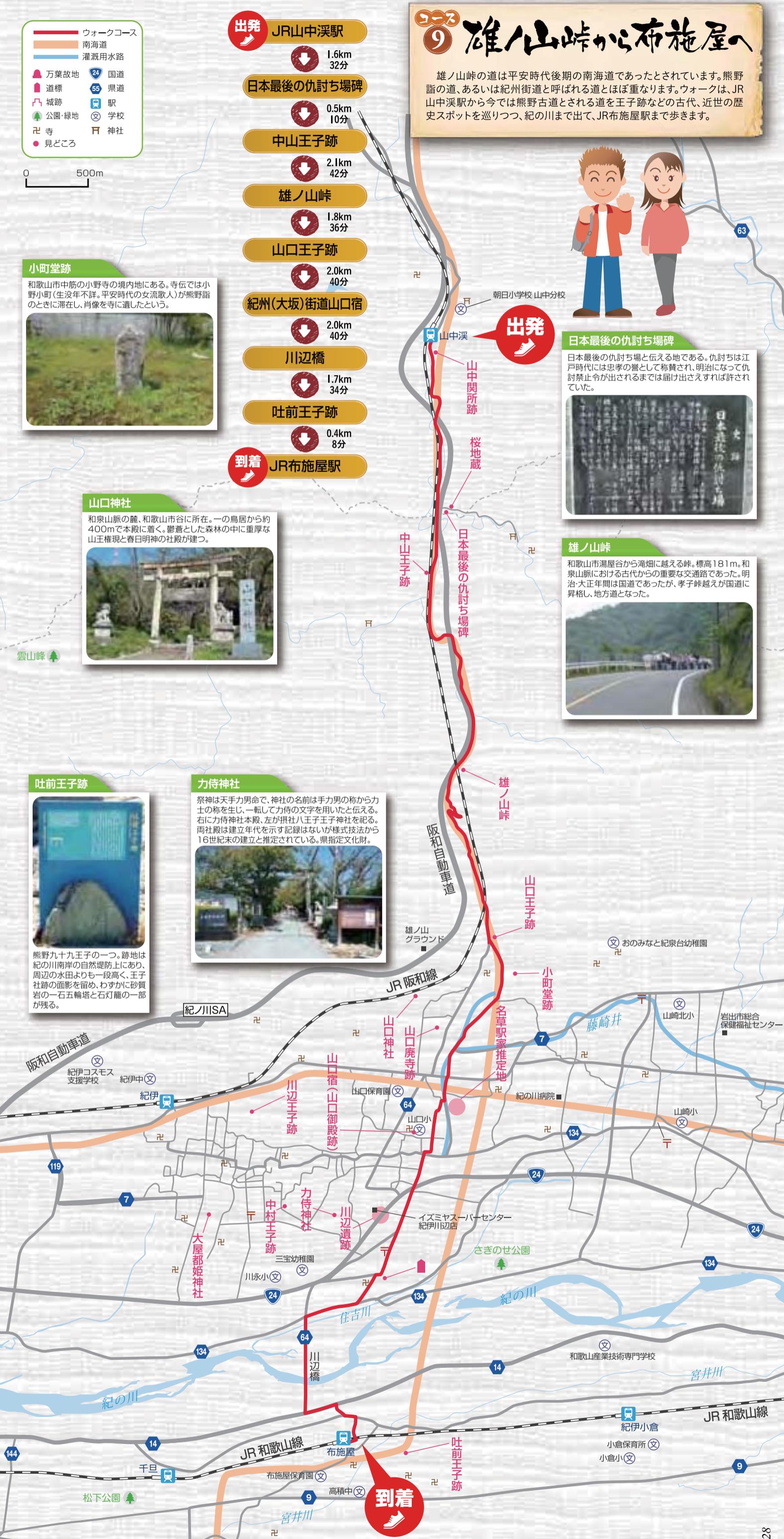
日本最後の仇討ち場碑

日本最後の仇討ち場と伝える地である。仇討ちは江戸時代には忠孝の誉として称賛され、明治になって仇討禁止令が出されるまでは届け出さえすれば許されていた。



雄ノ山峠

和歌山市湯屋谷から滝畑に越える峠。標高181m。和泉山脈における古代からの重要な交通路であった。明治・大正年間には国道であったが、孝子峠越えが国道に昇格し、地方道となった。





南海道と熊野古道

平安時代の南海道は和泉国から雄ノ山峠を越えて紀伊国に入りました。雄ノ山峠を通る道は延暦23年(804)に桓武天皇が紀伊国へ行幸した帰り道に「雄山道」を通ったことが記されています。南海道の駅家について、弘仁2年(811)に萩原(かつらぎ町)・名草(和歌山市山口)・賀太(和歌山市加太)駅を廃止した記録があります。平城京に都があった奈良時代は真土山を越えて、紀の川の北岸を三つの駅家を利用して使いが往来していたのでしょう。難波京・長岡京に都があった時代は紀見峠を越えて奈良時代の南海道を利用していたのでしょう。翌年の記録には紀伊国名草駅を廃止して更に萩原駅を置いたと記されています。前の年に廃止されたはずの名草駅の廃止を記録し、代わって萩原駅を置き換えたということだと思えます。新しく設置された萩原駅は岩出市に置かれました。承和12年(845)の文書を見ると、そこに山前(やまさき)郷萩原村の名前があり、その田地を売り渡した記録が見えます。萩原村は現在の岩出市山付近と考えられています。また、その記録を見ると、南北に駅路(南海道)・東西に駅路の通っていることがわかります。すなわち、雄ノ山峠から南にきた南海道が岩出市で西に向かっていることがわかります。桓武天皇の行幸は行きも雄山道を通っていたことが推測されますので、この頃に駅路として準備されていたのではないかと推測されています。この雄ノ山峠を越える道路のちに高野山参詣の時に藤原道長や頼道が通り、その後は熊野詣の道として利用されるようになり、今は熊野古道の名前で使われています。紀の川を渡った後の熊野古道は、かつては南海道として利用されていた可能性があります。平城京で出土した木簡によれば、天平4年(732)に安曇郡(現在の有田郡)に駅戸のあったことが記されています。一般的に駅戸は駅家の近辺に置かれています。すると有田郡の駅戸から有田郡内を南海道が通過したと想像することができます。その南海道のコースは現在の熊野古道が踏襲している可能性もっています。

矢田峠

紀の川南岸の熊野古道を歩いていくと和佐王子跡を過ぎて、矢田峠を越えます。峠の頂上部では山を切通して道路が続いています。南海道が設計建設された頃、全国的に平野部では直線指向の道路が敷設され、丘陵部では切通で通じるように作られていました。矢田峠はその頃の切通を踏襲していると思われる。



矢田峠

伊太祁曾神社

祭神は五十猛命・大屋津姫命・爪津姫命の三神で、一括して伊太祁曾三神ともよんでいます。五十猛命は『日本書紀』(神代上)の宝剣出現の段には、五十猛命は我が国に木種をもたらしした神でその功によって有功之神と称されたといわれています。伝えによると伊太祁曾三神はともに現在の日前国懸神宮の地に鎮座していましたがその地を神宮に譲って三神ともに山東に遷座したといわれています。大宝2年(702)にそれぞれが場所を移動したが、伊太祁曾神社だけは山東にとどまったといわれています。1月15日には魔除け・厄除けの祭りである卯杖祭が行われ、14日夜の粥占の神事ではその年の農作物の豊凶を占う祭りが行われています。

高積山(神南備山)・高積神社

高積山(標高237m)、通称和佐山の山頂に鎮座しています。祭神は都麻都比売命で相殿に大屋都比売命・五十猛命の2神を祀り合わせて三神を祀るので高三所明神ともいわれています。伝えでは神社は、元日前国懸神宮が鎮座する地に

あったが、鎮座地を譲って山東を経て和佐高山に移ったといわれています。同様に遷座したという伝えをもつ社に伊太祁曾神社・大屋都姫神社があります。大屋都姫神社は大宝2年(702)に現在地の和歌山市宇田森に移ったことが記録から推測されています。

岩橋千塚古墳群

矢田峠東の岩橋山塊には6世紀代、天王塚古墳をはじめ豊富な埴輪群をもつ大日山35号古墳など丘陵頂部に主軸長100m弱の前方後円墳が築造されました。これらの大型古墳の被葬者を支えた有力家族たちも6世紀代、円墳を中心に4基前後の古墳を密に築造し全国でも最大級の古墳群を形成しました。その多くは岩橋式と呼ばれる横穴石室を構築しました。



薬勝寺廃寺跡

矢田峠から南下する古道と貴志川方面からの古道が伊太祁曾神社周辺で合流し有田、日高、牟婁を目指します。亀の川流域平野部の北部丘陵裾に営まれた薬勝寺廃寺は佐野廃寺式軒丸瓦を出土する白鳳寺院跡で、「霊異記」にみえる薬王寺とみられています。



熊野古道と王子社

熊野古道とは、熊野三山への参詣の道の総称です。紀伊路、小辺路、中辺路、大辺路、伊勢路の5ルートがあります。このガイドブックでは大阪から熊野に向かう紀伊路について述べています。熊野地域は日本書紀の時代から“聖なる地”でしたが、この地への参詣が流行し特別な“道”(熊野詣での道)となっていくのは、宇多法皇の熊野行幸(907年)以来です。王子社とは、熊野修験者により組織された神社群で、参詣途上で儀礼を行う場であり、休憩所の役割も果たしていました。一般に九十九王子(99は実数でなく多いという意味)と言われるほど沢山の王子社が建てられていました。現存する王子社は希で、殆どは王子跡となっています。なお王子社は元来神社ですが、祭礼では神事とともに読経も行われ、神仏習合が行なわれていました。



各王子社説明

王子社は和歌山県内では、中山、山口、川辺、中村、吐前、川端、和佐、平緒、奈久智、松阪、松代、菩提房、祓戸、藤白、塔下…と続きますが、以下に幾つかの王子を説明します。

中山王子跡

大阪府から和歌山県に入って最初の王子社。本来の王子社の場所には現在鉄道が通っています。

山口王子跡

雄ノ山峠を越え集落が近くなったところにあります。「紀の関守」を詠う万葉歌の歌碑があります。ただし、万葉歌にある「紀の関」がここであったことは疑問視されています。



山口王子跡

川辺王子跡

山口王子跡を過ぎ、山口神社の鳥居を見て進めば至ります。藤原定家の日記に出てくる王子です。祭神は力侍神社に遷座しています。現在王子跡に小さな祠が祀られています。

中村王子跡

紀の川を渡る直前の王子で、力侍神社の西方にあったとされます。力侍神社に合祀されています。

吐前王子跡

紀の川を渡って最初の王子。現在地は畑の中となっています。

川端王子跡

JR布施屋駅近くにあり。小栗街道沿いとも言われています。高積神社に合祀。

和佐王子跡

古道が県道9号と交差する位置にあり、休憩所のある広場となっています。近くに和佐大八郎の墓があります。

平緒王子跡

矢田峠を降りて、伊太祁曾神社近くの平尾自治会館の前にあります。

奈久智王子跡

民家の裏山に碑があります。この王子の場所については確定されていません。



松阪王子跡

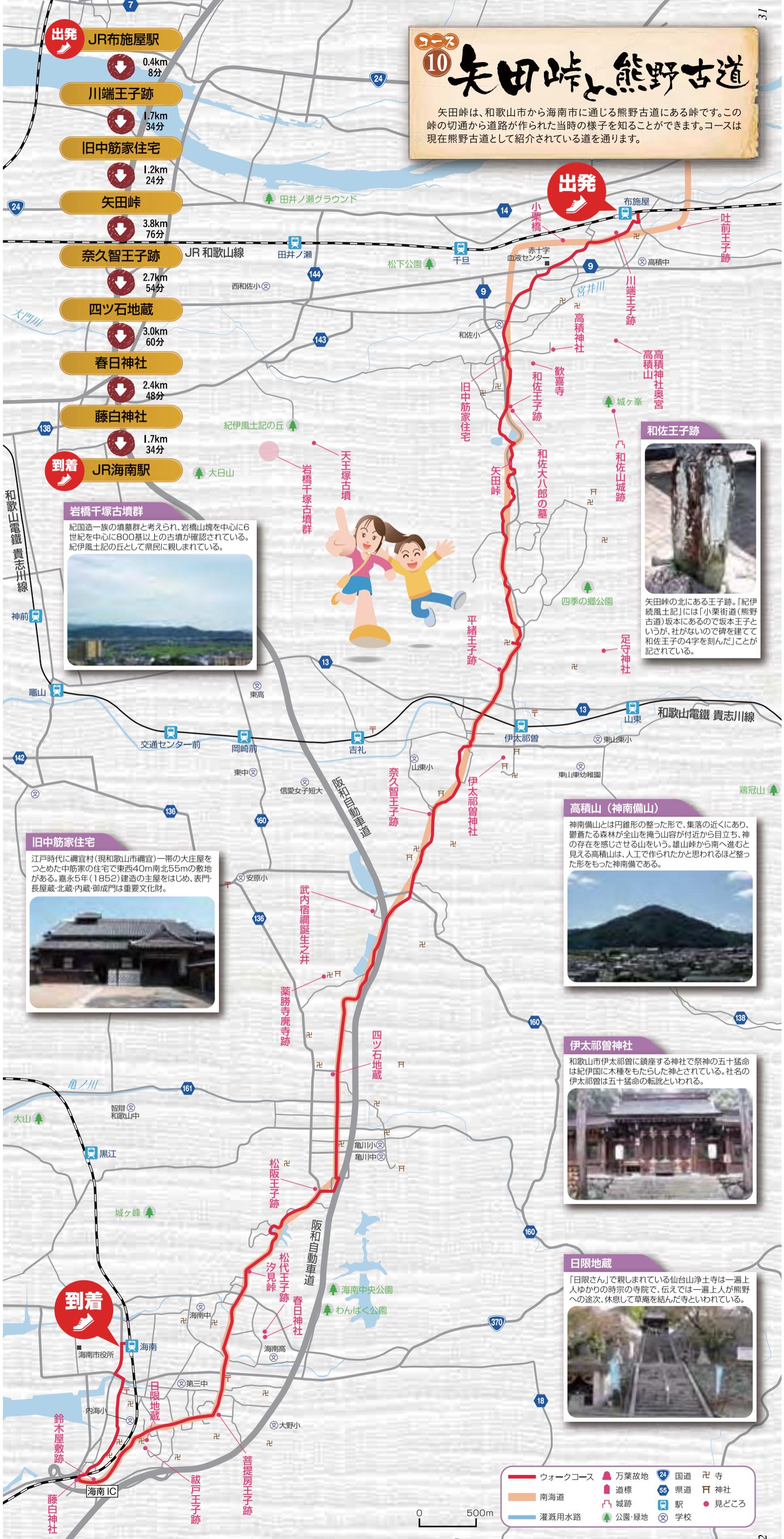
奈久智王子から南下して、海南市に入ります。小祠と説明板があります。この後、海南市域で、松代王子跡、菩提房王子跡、祓戸王子跡を通り、藤白王子跡に至ります。

藤白王子跡

藤白神社と同所であり、九十九王子の中でも、五体王子と呼ばれる格式の高い王子です。この先が本格的に熊野三山の霊域となります。

コース 10 矢田峠と熊野古道

矢田峠は、和歌山市から海南市に通じる熊野古道にある峠です。この峠の切通から道路が作られた当時の様子を知ることができます。コースは現在熊野古道として紹介されている道を通ります。



- 出発** JR布施屋駅
- 0.4km 8分
- 川端王子跡
- 1.7km 34分
- 旧中筋家住宅
- 1.2km 24分
- 矢田峠
- 3.8km 76分
- 奈久智王子跡
- 2.7km 54分
- 四ツ石地蔵
- 3.0km 60分
- 春日神社
- 2.4km 48分
- 藤白神社
- 1.7km 34分
- 到着** JR海南駅

出発

到着

岩橋千塚古墳群

紀国造一族の墳墓群と考えられ、岩橋山塊を中心に6世紀を中心に800基以上の古墳が確認されている。紀伊風土記の丘として県民に親しまれている。



和佐王子跡

矢田峠の北にある王子跡。「紀伊続風土記」には「小栗街道（熊野古道）坂本にあるので坂本王子というが、社がないので碑を建てて和佐王子の4字を刻んだ」ことが記されている。

旧中筋家住宅

江戸時代に禰宜村（現和歌山市禰宜）一帯の大庄屋をつとめた中筋家の住宅で東西40m南北55mの敷地がある。嘉永5年（1852）建造の主屋をはじめ、表門・長屋蔵・北蔵・内蔵・御成門は重要文化財。

高積山（神南備山）

神南備山とは円錐形の整った形で、集落の近くにあり、鬱蒼たる森林が全山を掩う山容が付近から目立ち、神の存在を感じさせる山をいう。雄山峠から南へ進むと見える高積山は、人工で作られたかと思われるほど整った形をもった神南備である。

伊太祁曾神社

和歌山市伊太祁曾に鎮座する神社で祭神の五十猛命は紀伊国に木種をもたらした神とされている。社名の伊太祁曾は五十猛命の転訛といわれる。

日限地蔵

「日限さん」で親しまれている仙台山浄土寺は一遍上人ゆかりの時宗の寺院で、伝えでは一遍上人が熊野への途次、休息して草庵を結んだ寺といわれている。

- ウォークコース
- 南海道
- 灌漑用水路
- 万葉故地
- 道標
- 城跡
- 公園・緑地
- 国道
- 県道
- 駅
- 寺
- 神社
- 学校
- 見どころ

コース
12

大崎の湊

大崎は古くから栄えた湊であり、万葉集にも大崎を詠んだ句があります。JR加茂郷駅を出発し、海南下津高校を過ぎて北に坂道を進みます。海岸沿いを道なりに和歌浦を眺めながら進み、途中で農業用道路を進むと大崎万葉歌碑に着きます。

到着
JR加茂郷駅
2.9km
58分

女良古墳
4.4km
88分

大崎バス停
0.9km
18分

大崎万葉歌碑
4.8km
96分

出発
JR加茂郷駅

善福院

寺の前身は、広福禅寺という禅宗の寺で、明治時代に善福院と称されるようになった。本堂となった釈迦堂(国宝)は、鎌倉時代後期の建立と推定され、その時代に善利として興隆していたことが偲ばれる建物である。



福勝寺

江戸時代は紀州藩主の祈禱所であった寺で、本堂(重要文化財)は室町時代中頃の建築と推定されている。隣接の救聞持堂(重要文化財)は慶安3年(1650)の建立。境内西方に裏見の滝がある。



御所の芝

地蔵峰寺の裏手に上った場所で、白河上皇熊野御幸の行宮跡といわれている。海南の海は今、臨海工業地帯となっているが、名高の浦や黒牛の海、名草山からは和歌浦・雄賀崎・加太・友ヶ島、遠く淡路島や四国、六甲の山並みまで一望できる。



コース
11

藤白坂越

藤白の名前は有間皇子の歌で知られています。この地で処刑された有間皇子の悲劇を想いながら藤白の急坂を登ります。峠を越えた御所の芝から見渡す海は、熊野古道でも有数の景色と言われています。ウォークは橋本王子跡までは熊野古道コース沿いに下り、その後JR加茂郷駅へと向かいます。

到着
JR加茂郷駅
4.6km
92分

橋本王子跡
2.4km
48分

地蔵峰寺(塔下王子跡)
2.0km
40分

藤白神社
2.3km
46分

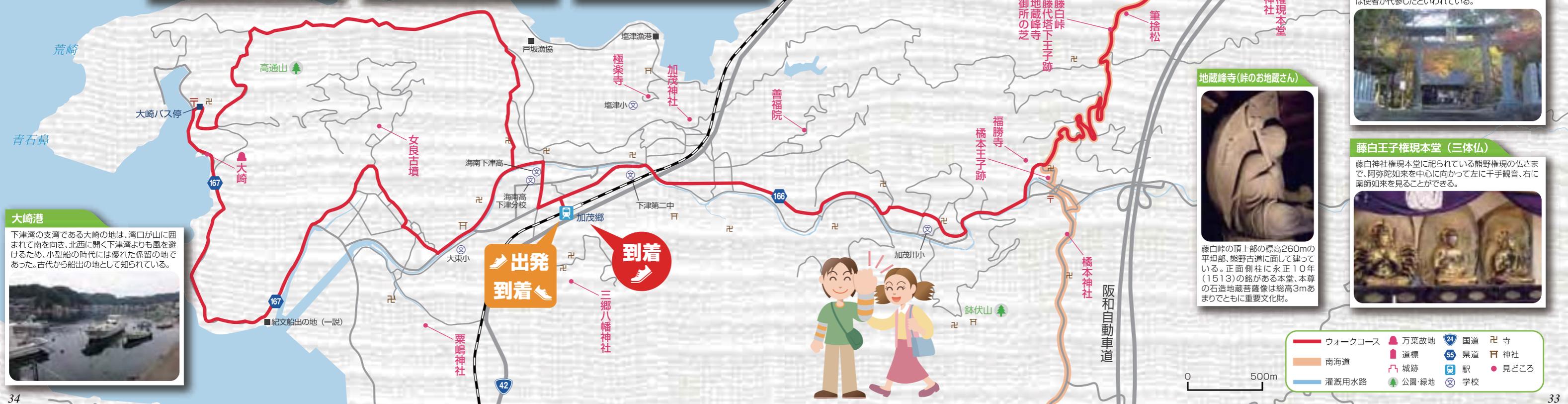
出発
JR海南駅

出発



大崎港

下津湾の支湾である大崎の地は、湾口が山に囲まれて南を向き、北西に開く下津湾よりも風を避けるため、小型船の時代には優れた保留の地であった。古代から船出の地として知られている。



藤白神社

社伝によれば景行天皇5年の鎮座、斉明天皇が牟婁の温湯(現白浜町湯崎温泉)への行幸時に祠を創建、奈良時代の聖武天皇や孝謙天皇の玉津島行幸のときには使者が代参したといわれている。



藤白王子権現本堂 (三体仏)

藤白神社権現本堂に祀られている熊野権現の仏さまで、阿彌陀如来を中心に向かって左に千手観音、右に薬師如来を見ることが出来る。

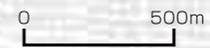


地蔵峰寺(峠のお地藏さん)



藤白峠の頂上部の標高260mの平坦部、熊野古道に面して建っている。正面側柱に永正10年(1513)の銘がある本堂、本尊の石造地藏菩薩像は総高3mあまりでともに重要文化財。

- ウォークコース
- 南海道
- 灌漑用水路
- 万葉故地
- 道標
- 城跡
- 公園・緑地
- 国道
- 県道
- 駅
- 学校
- 寺
- 神社
- 見どころ





コース 13 和歌浦・雑賀崎

和歌の浦・玉津島 一聖武天皇行幸と万葉歌一

和歌の浦の歴史は、神亀元年(724)に聖武天皇が紀伊国行幸で玉津島まで来られた時に始まります。

当時紀の川河口は現和歌川の流路で和歌浦湾に注いでいて、玉津島付近は砂洲、小島の浮かぶ地であり、聖武天皇はこの景観に感動し、これを保護するよう詔を発せられました。この時従駕した山部赤人等宮廷歌人は、玉津島の讃歌や片男波の情景に感動した歌々を残しています。和歌の浦の景観は、歌枕として後々まで有名となります。

やすみし わご大君の 常宮と
仕へ奉れる 雑賀野中
そがひに見ゆる 沖つ島
清き渚に 風吹けば 白波騒ぎ
潮干れば 玉藻刈りつつ
神代よりしかぞ責き 玉津島山

和歌の浦に 潮満ち来れば
瀉をなみ 葦辺をさして 鶴鳴き渡る

名草山 言にしありけり 我が恋ふる
千重の一重も 慰めなくに



高津子山からの和歌浦湾眺望

和歌の浦 一その後の景観の整備と保全 (名勝指定)一

和歌の浦は近世に入っても紀州徳川家により整備、保護されます。東照宮、妹背山多宝塔、観海閣など、新たな景観を形成する建造物も建立され、名所としての名声は高まります。そして現代においては、かつての島嶼は妹背山が唯一の島として残り、他は鏡山、雲蓋山、奠供山など陸地での小山として新たな景観を形成、さらに片男波公園の整備により市民の文化・レクリエーション地域となっており、一帯は国により名勝と指定され保全されています。

片男波公園
万葉歌でも詠われた風光の地を、長い砂洲半島を主体に歴史的景観に配慮して公園整備。散策路、万葉館、海水浴場など市民の憩いの場となっています。

その他このコースでの見どころ
養翠園
国指定名勝。池泉回遊式の名庭園。海沿いの立地ゆえ海水を池に取り込んでおり、潮の干満に応じて水面が変化します。

湊御殿
紀州藩主の隠居所として造営されました。何度かの焼失・再建を経て奥御殿の建物が養翠園に隣接する現在の地に移設されました。

番所庭園
番所の鼻と呼ばれ、海に突き出た地形が海防・見張りの要地でした。今は、大芝生のある庭園として海洋眺望絶佳の地です。

紀三井寺
名草山中腹にある寺院。山内に三つの井戸があることが名前の由来とされています。西国三十三所の2番札所です。

妹背山・多宝塔
玉津島神社から東側に三断橋を渡ったところにある小山。昔和歌浦湾に浮かんでいた島嶼で唯一現在も“島”として残っています。紀州藩初代藩主徳川頼宣により整備されました。多宝塔は頼宣の生母養寿院の遺骨が収納されており、また塔下の石室には15万個以上の経石が納められていました。

東照宮
徳川頼宣により父家康を祀るために造営されました。頼宣自体も祭神となっています。豪華・絢爛さは日光東照宮と比較されます。本殿と拝殿の間に石の間を持つ、「権現造」の建築物です。この神社の例祭は江戸時代から国中一の大祭で、近年、「和歌祭」と復興し親しまれています。

雑賀崎の夕陽
雑賀崎の岬から見る夕日は絶景で特に彼岸の中日に、観光灯台から「はながふる」特別な夕日が見られる、ということでカメラファンが集まります。



雑賀崎の夕陽

高津子山
標高136mと低い山ですが、頂上から360度のパノラマ展望は絶景。特に和歌の浦を一望するベストスポットです。

水軒堤防
江戸時代に紀の川河口部南岸に築かれた約1Kmに亘る堤防跡。



コース 11 藤白坂越 大崎の湊

海南・藤白・大崎と万葉集

万葉びとは南海道を西に真っ直ぐに進みますと、加太で初めて海に出会います。一方、雄ノ山峠を越えて、布施屋辺りで紀の川を渡り、南下しますと、汐見峠(熊野古道の松阪王子を過ぎてしばらく行くこの峠です)を越えたとたんに前方に海を発見します。憧れの海に接して、峠越えて流した汗もすっとひいたことでしょう。

これから道は山また山を越え、ところどころに南国の明るい海を眺めながら南へ南へと進みます。まず藤白です。ここには楠の太木が聳える藤白神社があります。平安朝以降の熊野詣では、熊野九十九王子のうちでも、別格の五体王子社のひとつとして、熊野への入り口をなします。

ここから御所の芝までの急な山道が藤白坂です。この坂は有間皇子のたどった道でもあります。斉明天皇4年(658)、天皇一行が牟婁温湯(白浜温泉)に出かけて、都が留守の間に、皇子はクーデターを計画し発覚して捉えられます。そして牟婁温湯に護送され尋問を受け、帰される途中の藤白坂で絞殺されます。あたら19歳の命でした。この折の皇子の歌が万葉集に収められています。

いはしろ 岩代の 浜松が枝を 引き結び
真幸くあらば またかへりみむ
家があれば 筈に盛る飯を 草枕
旅にしあれば 椎の葉に盛る

藤白神社から10分ほどのぼったところに皇子のお墓と伝えられている場所(「椿の地藏さん」)があります。そこに「家があれば」の歌碑が建っています。ここからの山道を、皇子の思いを反芻しながら登ってみましょう。1350年前の、古代の歴史と歌と人がなまなましく蘇ってきます。

みさか 藤白の 御坂を越ゆと 白妙の
我が衣手は 濡れにけるかも

この歌は有間皇子事件から43年後の持統天皇紀伊国行幸の折に詠まれたものです。こんなに長い年月が経っても、皇子の悲劇は昨日のこのように偲ばれたのでした。なお、藤白神社の境内に有間皇子神社が建てられ、そこには若き有間皇子の肖像画が掲げられています。雑賀紀光氏の手になるものです。

藤白坂を登りきった御所の芝からの眺めは絶景というほかはありません。眼下には石油備蓄施設と発電所がデンと鎮座していますが、ここがかつての名高の浦と黒牛潟です。海の方こうに和歌の浦、玉津島、雑賀崎、加太、友ヶ島、そしてさらにその先には淡路島を見はるかすことができます。あまりの好風に息を呑みます。有間皇子はここに立ってどんな思いにかられていたのでしょうか? 名高の浦と黒牛潟は埋め立てられてその姿を消してしまいましたが、「名高」、「黒江」としてその名を現在に残しています。

なたか 紫の 名高の浦の なびき藻の
心は妹に 寄りにしものを
くろうしがた 黒牛潟 潮干の浦を 紅の
たまも 玉裳裾引き 行くは誰が妻

御所の芝からは橋本をめざします。今は一面のみかん畑の中ののどかな下り道です。そして加茂郷から大崎に足を伸ばしてみましょう。大崎は、下津湾の中、三方を山に囲まれて南に細く口を開いています。そのためにとても波穏やかな港です。

そばま 大崎の 神の小浜は狭けども
ももふなびと 百船人も 過ぐといはなくに

こんなに狭い港だけれど、ここを通る多くの船はこの大崎に停泊していくのだと詠んでいます。三方を山に囲まれた天然の良港だったからでしょう。この歌は天平11年(739)3月、石上乙麻呂が罪を得て土佐国に配流せられた折に詠まれた歌群の中の一詩です。当時の船旅は危険に満ち満ちていたことを思いすると、この波静かな大崎での泊まりは、旅人にひと時のやすらぎを与えたことでしょう。なお大崎は、加太の田倉崎辺りだとする見解もあります。

女良古墳
大崎の湊を目指す山越えの道の起点となる丸田地区の丘陵裾に築かれた6世紀後の円墳で横穴式石室を埋葬施設としています。大崎と加茂郷を結ぶ交通路を掌握した有力家族の墳墓ではないかと考えられています。



女良古墳

養翠園

国指定名勝。池泉回遊式の大庭園。海沿いの立地ゆえ海水を池に取り込んでおり、潮の干満に応じ水面が変化する。



天満神社

菅原道真が大宰府左遷の折、風雨を避けるため和歌浦に立ち寄ったという縁により建立される。和歌浦一円の氏神として崇められている。



東照宮

徳川頼宣により父家康を祀るために造営される。頼宣自体も祭神となっている。豪華・絢爛さは日光東照宮に比される。本殿と拜殿の間に石の間を持つ、「権現造」の建築物である。



玉津島神社

和歌の神様として信仰を集めてきた神社。当初は玉津島そのもの(玉津島を含む島々)が神として祀られていたと考えられる。



コース13 和歌浦・雑賀崎

万葉の時代、南海道を経て紀伊国に行幸した天皇たちは、和歌浦の景観に感動し、そのすばらしさを多くの歌に詠みました。山部赤人等宮廷歌人による和歌浦・玉津島を讃える歌も多く残されています。コースは市内西浜地区までバスを利用(長路バス停)、そこから雑賀崎へ向かい、風景を楽しみながら紀三井寺まで歩きます。

JR・南海和歌山市駅 JR和歌山駅

バスで移動 4.7km 15分 7.3km 30分

出発 長路バス停

0.8km 16分

養翠園

2.5km 50分

番所の鼻

3.7km 74分

天満神社

1.5km 30分

片男波・万葉館

2.8km 56分

紀三井寺

0.7km 14分

到着 JR紀三井寺駅

不老橋

アーチ型の石橋。和歌祭の際、徳川家を通る「御成道」として架橋されたもの。勾欄部分の雲を文様化した彫刻が優れている。



妹背山・三断橋

玉津島神社から妹背山に繋がる県内最古の石橋。中国の杭州西湖の六橋を模したとされ、小アーチ型橋を3カ所繋げている。徳川頼宣により架橋される。



名草山

名草山は万葉集にも詠われている。和歌の浦の背景を形作るなだらかな山。海側から眺めると心が慰められる風景である。



0 500m

- ウォークコース
- 南海道
- 灌漑用水路
- 万葉故地
- 道標
- 城跡
- 公園・緑地
- 寺
- 見どころ
- 国道
- 県道
- 駅
- 学校
- 神社



南海道と歩く

いにしへの南海道をたどり、歴史と景観を楽しむガイドブック

編集・発行 紀の川流域文化遺産活用地域活性化協議会
〒640-8215 和歌山市橋丁 23 番地 N4 ビル 1 F
TEL&FAX 073-428-2688

印刷・製本 株式会社ウイング

発行日 2016 年 3 月 31 日



このガイドブックは、文化庁「文化遺産を活かした地域活性化事業」
(平成27年度)の助成により制作しました。